

ヒマラヤ

No. 103

●特集 ヒマラヤの祭り



1980 JUN.

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

——ナンダ・コット(6,861m)の許可内定——

H A Jは、一人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来、4度にわたり延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は、確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統括のもとに、安全かつ確実に第1にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の習得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしております。

81年は、日本のヒマラヤ登山が初まって45周年にあたります。H A J登山学校はその発祥の地、ナンダ・コットで行なう予定です。

ナンダ・コットはインナー・ラインにあり、未

解禁のピークですが、H A Jの特別な活動により実現する見通しであります。渉外上、メンバーを早く確定させる必要がありますので、できるだけ早く申しこんで下さい。

目的 ①ナンダ・コット(6,861m)の登頂。

②ヒマラヤ登山の基礎習得

時期 1981年9月14日(日)～10月12日(日)

29日間(登山期間15日間)

負担金 69万円(航空運賃、他の変動によりスライド)

定員 隊員20名(申込順) インストラクター4名

申込み 1980年8月31日まで下記あて申込むこと
(詳しい資料を送ります。)

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル新館506 日本ヒマラヤ協会

表紙の言葉

カフィリスタンの女性

雁部 貞夫

名はビビ、1975年当時で17歳。黒褐色の貫頭衣を着るのが彼女らの習いだ。

カフィール人は、回教徒から見た異教徒の意で特異な風俗と習慣で知られる。

——バンボレット谷にて——

ヒマラヤ No.103

1. ヒマラヤ放談 ————— 小林 静生

4. ヒマラヤニュース <地域・文献・新刊>

7. 集会案内・新入会員紹介・集会報告

12. 昭和55年通常総会報告

20. 特別稿 国際協力 — 私の場合 — ————— 石田 進

23. 特集 ヒマラヤの祭り パキスタンの祭り ————— 雁部 貞夫

27. カンチ通信No. 3

28. 連載 遠征学入門^⑬ ————— 清水 澄
ヒマラヤ閑話^⑳ ————— 五百沢智也
V. エルウィン小伝^㉑ ————— 藤井 毅

34. 事務局日誌

ヒマラヤ放談

登山が単なるスポーツと割り切れないのは、様々な要因によるものだが、世に出る山の本の膨大な量は、それを物語る最も重要な要因といえる。その中には、高度な文学作品も少なくない。ひとつの行為の世界において、このような現象が見られるのは、恐らく山だけであろう。今月はその山の本のハナシを、東京は小岩の古書店の主、小林静生氏に語ってもらうことにした。



小林 静生

見た瞬間に価値判断

—— 山の本はもう長く扱ってらっしゃるんですか？

小林 もう10年ぐらいかな。昔近代文学をちょっとやってたもんだから、古本商売は15～16年やってるけど。

—— 文学というと同人か何かに入って書いておられたんですか？

小林 うん、少しね。夏目漱石の研究が主で、ものすごく凝っていた。だから古本も最初近代文学でいこうと思ったんだけど、これは神田あたりで専門的にものすごく集めてやってる人がたくさんいる。同業者が多すぎるんですよ。で、ちょっと変ったところをやろうかと思ったわけ。若い頃から山は好きだったからね。

—— 山岳図書を専門的に扱ってる古本屋さんってどのぐらいあるんですか？

小林 あんまりないね。僕が始めた頃なんてまったくなかった。悠久堂くらいだったなあ。

—— 趣味と実益を兼ねるというのは、端目には楽しそうに見えますが、実際は大変でしょうね。

小林 本の良さ、価値というものが見てすぐに判断できなければならない。全部中身を読んでる時間はないからね。読まなくても見た瞬間に判断できなきゃだめだ。せいぜい序文とあとがきを読むくらいですね。そういう意味で山岳図書なんて

いうのは、本当に特殊な人間にしかできないね。まあ山の本っていうのは比較的ていねいに作られていて、いわゆる悪本というのはあまりないね。

—— 山岳図書というのは商売のベースに乗りにくいから、もうけてやろうという気持ちで作られていないんですね。それでていねいなんじゃないですか。

小林 それは言えるね。売ろうという気があまり出ていない。もっともここ2～3年では多少売ろうという姿勢も見えるけどね。文庫本や新書本に山の本がかなり目立つようになってきたのもそのひとつのあらわれでしょう。

今は読むために読む時代

—— 趣味で山の本を集めるというのは、自分の好きなものだけを集めてればいいんですから楽しいでしょうけど……。

小林 商売となるとそうはいかない。特に岐路に立たされる時というのは、神田の古本市なんかでもものすごくいい本を見つけた時ですね。何万も何十万もするようなゾクゾクしてくるやつ。これはもう絶対欲しいわけ。だけどこんなの仕入れてきて店頭に出したって売れやしないんだよな。しかし欲しいものはどうしても欲しい。

—— 苦しいところですね。で、その手のやつを手に入れると、今度は買い手がついて、小林さんのほうで手離したくなくなったりして……。

小林 そうなんだなあ。だからこれ見てごらんよ（裏の書庫を見せてもらう。店頭に並んでるのはまた違った本がズラリと並んでいる。）

これなんか、まあ60〜70万円の値がつくね。こっちは全巻そろえたら100万は軽く越える。あれは……（延々とつづく）

—— ここ（書庫）にある本は売らないんですか？

小林 いや、本当に好きでどうしても欲しいという人があらわれたら、売りますがね。

—— しかし、商売として山の本を専門的にやろうとした時は、かなりの決心が必要だったでしょうね。まして10年前じゃ山そのものも今ほどポピュラーじゃないし。果たして商売になるかどうか……。

小林 うーん、案外そうでもないんだな。文学が好きで山が好きで、それできわめて必然的に山岳文学——そういうジャンルがあるとすれば——に凝ってそのまま突っ込んでいったという感じがすね。で、商売のほうはこれはまた別だね。というのは、表向きは私のところは山岳図書専門店というふうに見えるらしいけど、実際の山岳図書の売り上げというのは、総売上上の2〜3割がいいとこだね。

—— なるほど、まあそうですね。山の本なんてそうは売れない。でも、年とともに延びてはいるんでしょう？

小林 2〜3年前までは延びつつづけていたんだけどね。

—— 最近はどうですか？

小林 むしろ下向線です。今はね、山に登る人が山の本を読まない時代なんだよ。特にヒマラヤ関係の本が売れない。昔はヒマラヤに登りたいと思ったら、ヒマラヤの本を入手してこれを読破しなければ行けなかった。今はもうそんなことはない。登山隊はキチガイみたいに激増しているし、情報は洪水のように流れてるしで、本なんか読まなくてもヒマラヤに行けるんだな。

—— 今、実践してる人というのはあまり本を読まないようですね。まあ、人にもよるでしょうけど。

小林 行くために読む時代ではなくなった。今は読むために読む時代なんだな。で、こういう人

は数が少ないから、そこでヒマラヤの本の売れ行きは落ちてきた。たまに年とった人が来て高い本を買っていくこともあるけど、若い人にはまずいないね。若い人もうちの店に来るけど、雑誌か何かを買って帰る程度だね。

—— 本当に本が好きな人というのは、昔も今も変わってないわけですよ。ただ昔は本が好きじゃない人でも必要にせまられて買わざるを得なかったんですね。

小林 まあ、本の好きな人というのは、もう登れなくなった人ですよ。登れるうちは山へ行くだけで金も時間も使い果たしちゃうからね。そういう意味では一種の代替行為ですよ。

遠征隊は激増したが……

—— ヒマラヤの本のなかで好きな本を2〜3あげるとすれば。

小林 僕は登れないからね。ヒマラヤをロマンの対象として見ているから、最近のものにはぜんぜん興味がないね。ただ単に記録を追求しているだけで、人間の心に訴えてくるようなものはまずない。未知なるものに触れた時の心の底からの喜びとか、それを追求する人間の精神みたいなものがあふれているもの、こういうのはやはり昔のヒマラヤにしかないと思う。日本のものだったらマナスルの1,2とか、あるいは桑原さんや川喜田さんのものなんか読んで楽しい。西洋の古典はみないね。ポピュラーなところからあげるとM・エルズグの「処女峰アンナプルナ」なんて堂々たる文学作品ですよ。こう言っちゃ悪いけど、最近の遠征の報告書というのは、バカバカしくて読む気しない。

—— 結局あれは読ませるために出す本じゃないんですよ。次に実践しようとする人のための本なんです。

小林 つまり方法論だけなんだな。精神に触れるものは何も書かれていない。博識とか知性とかそういうものを別にして、登攀の部分だけで比較しても「処女峰アンナプルナ」の表現力に遠く及ばない。あれは山をまったく知らない人が読んで「ものすごくおもしろい」というでしょ。あれこそ「山の本」ですよ。そういう意味では遠征の

報告書なんてのは、あれは「本」とは言えないね。単なる資料にすぎない。

—— 資料にも資料としてのレーズンデートルはそれなりにあると思いますけど、でもそれだけじゃこの山の世界というのも非常にあじけないものになってきますね。

小林 あじけないし、その世界が非常に狭いものになってしまいますね。登山人口だけは激増して、ヒマラヤに行く人も激増してるけど、その世界の広がりはおかえておぼあててきてる。山の世界に「文学」があった時代というのは、登山人口は少なくとも、非常に面的な広がりを持っていたと思う。

—— 分離してしまったんですね。昔は先鋭的な記録の世界と山岳文学的な世界が、ひとつの場に同居していたと思うんです。今はどちらかに専門的に別れてしまっている。

小林 そうだね。めだたないだけで（山岳文学を愛する人も）いることといえるね。だけど昔みたいに実践する人が同時にやるのでなければ、生きた山岳文学は生まれて来ないんじゃないかな。懐古主義だけになってしまう。

今新たなヒマラヤ世界を……

—— 実践派にとっては同時代の人や行為に対する興味がものすごくあって、これは当然なことだと思うんですけど、過去の遺産に目を向けようとしなないというのは少し問題だと思いますね。接してみると、ティルマンやシプトンの世界ってすばらしいんですけどね。

小林 そう、視野が広がるんじゃないですか。ただ、ああいう時代はもう来ないでしょうね。黎明期というのは、一種独特なある精神の高さがあって、これは単なる表現力の問題だけじゃないんだな。ヒマラヤへの接し方がまるで違う。そのあたりに名著を生む要因があると思うな。そういう意味では誰かさんじゃないけど、山は死んだんだよ（笑）。日本の山もヒマラヤも死んだね。さっきからこんなことばかり言ってるけど、こんなヒマラヤ放談でいいのかな（笑）。

—— いいですよ。本来「放談」というのは、毒舌だらけであるべきシロモノですから（笑）。

小林 ただ、記録のみが最重要視される時代というのは、もうこれ以上は続かないような気がするね。僕の場合、商売柄特に他の人より敏感に感じとれるんだけど、ある兆しのようなものは確かに出てきているように思う。

—— そういえばクライミングの世界にもレベルは低いけど行為の中の精神的なもの——その時何を考え、何を感じたか——を文章化しようとする傾向は確かにありますね。ただ現段階ではひとりよがり、その世界を知らない人にまで訴える表現力はないようですけど。

小林 あじけない時代がいつまでも続くようでは困るしね。さっき「山は死んだ」と言ったけど、一度死んでもその後からまた新しいものが生まれて来ればいいんだからね。これはもう次の世代の仕事でしょう。ただ、悪いけど今のH A Jには、そういう姿勢があんまり感じられないな。外野から眺めているだけだからよくはわからないけど、もう少し何とかならないかという気がするんだ。H A Jには人材はあるんだし、もっとH A Jならではのレベルというものがでてきてもいいように思う。H A Jというのは、本来そういう団体じゃないのかな。

—— ひとつの方法として、ルームもできたことだし“ヒマラヤサロン”なるものを設定して、そういう中から小林さんのおっしゃられるようなものがでてくればと考えているんです。

小林 とにかくいろんな形で単なる記録や情報だけじゃないヒマラヤ世界を形づくってってもらいたいですね。期待していますよ。

—— 心してかかりたいと思います。どうもありがとうございました。

（インタビュー構成 角田不二）

小林静生氏のプロフィール

昭和10年10月25日、茨城県筑紫町出身。昭和37年より江戸川区小岩にて古書店（小林静雄書店）を開業し、45年頃より精力的に山の本を集める。かたわら東京都古書籍商業協同組合の仕事もし、49年12月には「東京古書組合50年史」をまとめた。これは千ページを越す膨大な書物で、業界では高く評価されている。店は京成小岩駅より徒歩3分の地にある。H A J会員。

地域ニュース

《インド》

本会評議員の沖允人氏はこの4月、イギリスからの帰路、インドに立ち寄り、最新のインド情報を持ち帰った。以下その概要である。

1. IMFの新事務所

新事務所が完成し、移転を待つばかりとなっている。新事務所はデリー空港近く、デリー市の南のPalam RoadとRing Roadの間のSignals Enclaveにある。タクシーの場合、Dhaura KuanのロータリーからVenkateshwara Collegeの先を右(西)へまわり、Rao Tularam Collegeのところをもう一度右まわり、次の道を右へまわってもらうと分りよい。

1979年6月6日に当時の首相などを招いていわゆる地鎮祭をし、起工した。

3階建のビルで、一部は宿泊所にもなっていて、20人位なら泊まることができる。

すでに会合には使用されているが、正式に移転するのは今年の秋になるようである。

2. 登山申請

無線機の申請書が、去年のものより面倒になっている。以前の申請書では不十分なので、新しい申請フォームで申請しないと使用許可ではない。

同一の山域の山へ同一の隊が入山し、2つ以上のピークに登った場合は2つ目のピークからは登山料(Booking Fee)が50%引になるという新規則はすでに実施されている。同一の谷、同一のB・Cからの登頂なら、同一山域とみなすと係員は話していたが、その点はケース・バイ・ケースで、リエゾン・オフィサーの了解のもとに登って欲しいようである。

一度登山料を払い込んだ後、何らかの理由で、中止した場合は、原則として返金されることになっている。しかし、インドの外貨事情から、手続に時間がかかり、実際に返金される例はほとんどない。しかし、他の山に変更したり、次の年に延期したり、他の隊にゆずったりすることはできる。そのむねを書いて隊からIMFへ手紙を出せばよ

い。もちろん早い方がトラブルは少ない。

3. オープン・エリア

昨年オープンした後の変更はない。オープン・エリアも明確になっており、IMFでは地図にするしをつけてすぐ分るようにしてある。これには「学研」のヒマラヤ地図のコピーが使用されていた。

注目のガンゴトリ山群は、ガンゴトリの村から、ガンゴトリ氷河の左岸がオープンしていて、氷河奥のYeombuk(5,953m)の南東の2つ目のピークP 5,755からMandaniの村を結ぶラインが境になっている。したがってチョウカンバ、サトパントなどは駄目である。

バンダールプンチ山群への接近路としてはHarsilの村からSian Gad谷からP 5,758を通り、スワロガロヒニの北の谷が北方の限界のようである。

1982年頃までかなりの隊が申請しており、当分インドヒマラヤはにぎわうようである。

4. 地図

デラドン、ムスリーなど山麓の町の1/5000くらいの地図が市販されるようになった。ただし、国外持出は禁止である。1/5万図はほとんど全域について完成しているようであるが入手するにはかなり困難な手続があり、外国人にはほとんど望みはない。

Survey of Indiaの地図はNew DelhiはMap Sales office(Janpath Barracks, "A", First Floor New Delhi-1)(土産物売場の2階)、Calcuttaでは、Survey of India, Eastern Circle(13, Wood Street, Calcutta-16)のMap Salesのセクションで入手できる。

もちろん、Dera DunのSurvey of Indiaの本部でも入手できる。New Delhiよりもカルカッタ、デラドンの方が版の新しいものが入手できる。1/100万程度のスケールの地図なら国外持出ができる。

5. アッサム、シッキム情報

シッキムはカルカッタに観光案内所を開いている。若いシッキム女性が愛想よく応待してくれるが、シッキム入域の許可は、ニューデリーの中央

HIMALAYA NEWS

政府の Home Ministry からでないとい得られない。
2～3ヶ月かかる。インナー・ライン・パーミットをとらなければならないからである。

トレッキングは Dzongri の村から Talung 氷河の南、Gocha Peak (6,115 m) の西あたりまで、また、Forked Peak の南、そして、Tikipchhu の村あたりまでが団体に限って許可になり、10日間滞在できる。

個人の観光の場合は4日間しか滞在できないし、東は Rongli まで、北は Phodong、西は Pemayangtse, Tashi Ding までである。

シッキム観光局は下記にある。

Delhi: Hansalaya, 15 Barakhanba Road, New Delhi 110001

Calcutta: Mansarowar Building, 3 B

Camac Street, Calcutta 700071

その他 シリグリ、バグドグラ、ダージリンにもある。

アッサム入域事情も3年ほど前とそう変りはない。一般にオープンされているのは

Gauhati, Kaziranga, Manas の動物園のみである。ここ以外は Gauhati の観光局で許可のとれる場合がある。

Tourist Information Office, Station Road, Gauhati - 1

または Directorate of Tourism, Assam, Gauhati - 1

なお、一般的な案内はカルカッタの Assam House (3 Russell Street, Calcutta) で得られる。(沖 允人)

ヒマラヤ10,000キロ オートバイ野郎の疾走

インドのマハラシュトラ州ユースホステル協会の5人のメンバーがオートバイによりヒマラヤを東西にかけめぐったという痛快な記録。

Dorzi Lahtoo (35) をリーダーとする一行は、79年6月初めにボンベイを出発した。デカン高原を横断してカルカッタへ、ついでシリグリ→ガウハティーを経て3,281 m のセ・ラを越えてブータンに入った。

ティンブーからダージリンへ、そしてシッキムのガントックから4,281 m のナツ・ラに立った。南下してトリブバン道路からカトマンズに入りボカラへ。この途中1人が足に軽傷を負う。

引返して、ハリアナからガルワールに入り、ナイニताल→アルモラ→ラニケット→バドリナートまでさか上り、ケダルナートを見てテリーからムスリーへ。

ここで地すべりに出会ったがかりうじて脱出した。

一行は更に、チャンディガールからマナリ、コクサールの山岳道路を走破し、パタンコットを経てスリナガルへ。(8月初旬着)

最後の行程は、ゾージ・ラを越えてラダックのレーまでの272マイルであった。

一行は更にバララチャ・ラを経てマナリへ抜ける予定だったが道路閉鎖のため断念した。

総走行距離10,000キロはインドでの長距離走行の新記録だという。

使用したオートバイは250cc、何ともうらやましいアドベンチャーである。

今年はモスコまでの長丁場に挑戦するチームがあるという。

〔編注〕HAJ 会員でヒマラヤの東端から西端まで山岳道路をひろいながらの大トラバースに挑戦してみませんか。(アルナチャルからヒンズークシュまで)

《ネパール》

今年発行されるネパールの切手

最近、ネパールでは面白い切手が出されているが、今年は次の3種が予定されている。

☆ゴダバリとダウラギリ

☆ヒマラヤの薬草(コショウとダイオウ)

☆文学者シリーズ(Gyan Dildas ら4人)

ランタンでヘリコプター墜落

昨年の12月27日の朝、ロイヤルネパールからチャーターし、西独のツーリスト5人が乗り込んだヘリがランタンから10kmの森林の中に落ちた。

生存者は無かったもよう、ヘリは陸軍所属のものだった。

文献ニュース

Himalayan Handbook

by J. Sircar, 1979

著者はカルカッタの銀行員であるが、ヒマラヤが好きで、山に登るだけでなく、登山史も研究している。20,000 フィート (6,096 m) 以上のネパール、カラコルム、インドなどヒマラヤ全域の山をABC順に並べ、その簡単な登山史を付したのが本書である。なかなか利用価値が高い。14×22cm 168 P, 30Rs。

自費出版なので本屋からは入手しにくい。下記のところに若干送ってきているので送金、送本代を含めて1,500円で申込みのこと。

〒468 名古屋市天白区一ツ山1-44-7

沖允人 振替 名古屋 71129 番

新刊図書一覧

- ① R・W・サザーン著／鈴木利童・訳、「ヨーロッパとイスラム世界」, 岩波書店, 1980・3, V + 201 p + Sp, 1,100 円, (岩波現代選書42)。
- ② メンデス・ピント著／岡村多希子・訳, 「東洋通歴記・3」, 平凡社, 1980・3, X + 323 p, 1,400 円, (東洋文庫373)。
- ③ 平山郁夫, 「シルクロード変幻」, 美術出版社, 1980・4, 144 p, 2,500 円。
- ④ 並河萬里, 「砂漠の華——ペルシアのやきもの——」, 文化出版局, 1980・3, 138 p, 3,200 円。
- ⑤ 並河萬里, 「砂漠の華——シルクロードのアクセサリー——」, 文化出版局, 1980・3, 138 p, 3,200 円。
- ⑥ 黒柳恒男・編訳, 「ペルシアの神話」, 泰流社, 1980・3, 268 p, 2,000 円。
- ⑦ バロス他著／池上岑夫・訳, 生田滋・訳注, 「アジア史——アルプ ケルケ伝——」, 岩波書店, 1980・3, xi + 594 p + 2 p, 6,300 円, (大航海時代叢書・第Ⅱ期・第二巻)。
- ⑧ 横山修／写真・文, 「シルクロード 横山修写真集——」, 創思社出版, 1980・3, 203 p,

28,000 円。

- ⑨ 屋形禎亮・編, 「古代オリエント」, 有斐閣, 1980・4, 231 p + X p, 650 円, (有斐閣新書)。
- ⑩ 塚本圭一, 「自然活動学のすすめ」, 岳(スプリ)書房, 1980・3, 354 p, 2,600 円。
- ⑪ 深井晋司, 「ペルシア古美術研究・第二巻」, 吉川弘文館, 1980・4, 264 p (A 4) + 20 p, 15,000 円。
- ⑫ 柿崎崇, 「私のイラン25年」, 東京新聞出版局, 1980・3, 260 p, 1,500 円。
- ⑬ 陳舜臣／NHK取材班, 「シルクロード——長安から河西回廊へ——」, 日本放送出版協会, 1980・4, 254 p, 1,500 円, (絲綢之路・第一巻)。
- ⑭ 講談社・中国人民美術出版社, 「中国の旅——敦煌と西北・西南——」, 講談社, 1980・3, 180 p, 1,800 円, (中国の旅・第3巻)。
- ⑮ 陳舜臣・陳立人, 「三蔵法師の道」, 平凡社, 1980・4, 144 p, 700 円, (平凡社カラー新書129)。
- ⑯ 朝日新聞調査研究室・編, 「アフガニスタン事件」, 朝日新聞社, 1980・4, 191 p, 660 円。
- ⑰ 小玉新次郎, 「バルミラ——隊商都市——」, 近藤出版社, 1980・4, 283 p + 9 p, 2,200 円, (世界歴史双書・24)。
- ⑱ 趙樸初・塚本善隆／監修, 日中友好仏教協会・中国仏教協会・編, 「中国仏教の旅・1——北京・太原・西安・洛陽——」, 美術出版・美乃美, 1980・4, 210 p, 2,000 円。
- ⑲ 鈴木斌・麻田豊, 「ウルドゥー語常用 6,000 語」, 大学書林, 1980・4, XI V + 400 p, 3,600 円。
- ⑳ 長崎暢子・編, 「南アジアの民族運動と日本」, アジア経済研究所, 1980・3, 229 p, 1,800 円。
- ㉑ 金岡照光・井上靖他著, 「続・シルクロードと仏教文化」, 東洋哲学研究所, 1980・4, 343 p, 1,600 円。
- ㉒ アレン・キンズバーグ著／諏訪優訳, 「インド日記——1962~1963——」, サンリオ, 1980・4, 359 p, 2,400 円。
- ㉓ 伊藤秀五郎, 「北の山」, 中央公論社, 1980・4, 228 p, 300 円, (中公文庫MI 22)。
- ㉔ 白旗史朗, 「山と写真 わが青春」, 岩波書店, 1980・4, 224 p, 480 円, (岩波ジュニア新書)。

特別講演

チベットとシッキムを語る

—— 6月7日・東京 ——

チベットとその南の入口にあたるシッキムは、ヒマラヤ・中央アジアに憧れる者にとっては聖域とも言えるはらかな地です。

最近になり、厳しい制限つきながらもチベットの一部への門が開かれ、また、シッキムも同様の情勢にあります。

今回、1959年のいわゆるチベット紛争の折に特別のルートによって南チベットに入られ、またシッキム国内を幾度かにわたって広く歩かれた、野田衛氏を講師に迎えて興味深い数々のお話を聞き、また貴重なスライドを見る機会を設けました。

大変貴重な場ですので多数の会員内外の方々の御参加を期待します。

記

1. と き 昭和55年6月7日 17時～20時
2. ところ 東京郵便貯金会館（東京都港区芝公園2-5-20）

3. 内 容

○講演 「チベットとシッキムを語る」

講師 野田 衛氏（サンケイ新聞社編集局
編集委員） ※スライド併用

○シッキム・ヒマラヤとトレッキング事情

講師 日本ヒマラヤ協会野外活動委員会

4. 会 費 無 料（但し、会員外は500円）

5. 申し込み

準備の都合がありますので5月31日までに連絡してください。

※講師のプロフィール

「ヒマラヤ」第101号インタビューにもあるように、氏は1959年のいわゆるチベット動乱の折に、国境の峠ナツ・ラを越えてギャンツェなど南チベットに入域した。また、折しもマクマホン・ラインを越えてインドに亡命してくる途中のダライ・ラマとシリグリにおいて会合した。シッキム王室、ブータン王室とは古くからの交流を持ち、昨年は、シッキム王妃の結婚式に招請されるなど、シッキムを度々訪れている。動乱前のラサおよびチベットの姿を伝えるスライド、シッキム北部のスライドなどはひじょうに貴重なものである。

※本年10月から11月にかけてH A Jが行なう「セミナー・トレッキング シッキム・ヒマラヤ」についても詳しい説明と地域事情等の紹介をいたします。セミナーに興味を持つ方は必ずおいでください。

予 告

第4回日本ヒマラヤ会議

—— 仙台 7日6日（日） ——

54年度に引続き、日本山岳協会の後援を得て、全国で開催する予定ですが、本年度最初の会場は仙台です。

高所登山を中心として、ヒマラヤに関する多くの情報を正しく早く伝え、かつ課題の解決を多くの人と共に考えようというのがこの会議です。

と き 昭和55年7月6日（日） 9時30分～17時

ところ 仙台共済会館（仙台市錦町1-8-17）

定 員 60 名

責任者

※内容としては「トレッキングで登れる山をめぐる諸問題」他を予定しています。くわしくは「ヒマラヤ」第104号に掲載します。特に東北地方会員の参加を期待します。

予 告

インド・ヒマラヤ研究集会

H・C・サリーン氏（IMF 総裁）を迎えて

今年度の国際交流事業として、インド登山財団（IMF）総裁H・C・サリーン氏を迎えての研究会を開催する予定で目下準備が進められている。

既にHAJからの招請状が送られ、これに答えてサリーン氏から喜んで受諾する旨の返信が寄せられている。

現在、氏は、グジャラット州に中央政府から派遣されており、日程的に多少のつめが残されているが、7月来日の予定である。

インド・ヒマラヤに関する最も権威ある集会を予定しているので多数の会員諸氏の御参加をお願いしたい。

日程等、目下調整中であるので、集会開催要項の詳細については、「ヒマラヤ」次月号に掲載の予定である。

新会員を御紹介ください

HAJのメリットをより多くの人に、55年度は飛躍的な会員増を期待しています。同志を1人でも多く。あなたのまわりを見わたしてください。きっと仲間がいるはずです。事務局まで御一報くださればすぐに案内をさしあげます。

会員名簿作成中

目下、新しい会員名簿を作成中です。住所、勤務先等に変更があった方は、至急事務局まで御連絡下さい。

新名簿は、6月初旬に出来上る予定です。

洋山岳書古書・新書 通信販売

○取扱書—世界全域山岳・探検・紀行・報告書。

●探求書がございましたらお知らせ下さい。探します。

●洋山岳書でご用済のものがございましたらお譲り下さい。誠実評価。

カタログご希望の方は、郵券¥200分同封ご請求下さい。

堀内章雄

〒151 東京都渋谷区代々木
1-21-9
登山とスキーの店山幸内
☎370-1100

◎会員住所変更

会員番号	氏 名
No.1112	干明 邦彦
No.1299	田中 敏春
No. 800	平野 栄子
No.1346	太田 陽三
No.1259	柿島 裕
No.1250	麻田 隆之
No. 290	真田 美智子
No.1195	坂野 宏三
No. 924	川崎 航洋
No. 867	野上 国広
No. 976	石黒 重恭
No. 975	石川真智子
No. 421	佐々木 正
No.1160	山田つばみ
No. 593	伊藤 叡一
No.1144	厚地 豊道
No.1314	志田セツ子
No.1118	安西 憲一

◎昭和54年度新入会員名簿④

(55.1.1～55.4.15)

	氏 名	
1377	藤岡 明生	55.1.5
1378	竹野 君代	55.1.11
1379	柴田 拓	55.1.16
1380	田中 英博	55.1.17
1381	畠山 優	55.1.19
1382	大野 広美	55.1.24
1383	豊田 昇	55.1.26
1384	斎藤 光明	55.1.28
1385	岩本 健一	55.1.30
1386	野畑 浩之	55.2.1
1387	勝田 誉士雄	55.2.1
1388	木辺 正夫	55.2.4
1389	飯田 徳治	55.2.5
1390	新郷 信廣	55.2.12
1391	菊地 春枝	55.2.13
1392	久保塚 隆子	55.2.13
1393	田中 基博	55.2.15
1394	滝口 康博	55.2.15
1395	北川 伸二	55.2.18
1396	森田 富雄	55.2.28
1397	石原 俊洋	55.3.4
1398	物井 洋子	55.3.4
1399	丸 誠一郎	55.3.14
1400	大澤 清	55.3.15
1401	石井 孝寿	55.3.24
1402	三ツ元 三郎	55.3.18
1403	武田 良雄	55.3.24
1404	遠藤 京子	55.3.25
1405	北村 敏郎	55.3.31
1406	山本 紘典	55.2.22
1407	山形 正巳	55.2.23
1408	村上 豊子	55.2.24
1409	奥畑 清美	55.4.2
1410	鈴木 莊平	55.4.4
1411	増田 伊世子	55.2.20
1412	松本 実千代	55.2.20
1413	金沢 健	55.4.7
1414	高場 健司	55.4.8
1415	松川 吉晴	55.4.10
1416	佐藤 孝允	55.4.12
1417	土谷 正伸	55.4.15

集会報告

各地でインド・ヒマラヤ集会

—— J・シン氏を囲んで ——

3月17日の仙台会場を皮切りに、23日までインドヒマラヤ集会が持たれた。

この集会は、エアー・インドシアとH A Jの招請で来日された Jogindar Singh 中佐（エアー・インドシア登山・トレッキング担当、IMF幹事）を囲む形で開催され、インド政府観光局の後援を受けたものである。

何分にもシン氏の来日が決定したのが3月初めであり、「ヒマラヤ」での広報が間に合わず、大部分の会員の方々に通知することができなかったのはまことに申しわけない次第であった。

また、各地の会場責任者をはじめ協力者各位には、短時日の間に準備をお願いし、多大のお骨折をかけたこと心から御礼申しあげたい。

◇仙台会場（3.17 19時～21時 参加者 28名
責任者 熊谷 洋氏 会場——宮城県婦人会館）

◇宇都宮会場（3.18 19時～21時 栃木県青年会館 参加者31名 責任者——小島守夫氏）

◇名古屋会場（3.20 14時～17時 愛知県中小企業センター 参加者28名 責任者——榊井照和氏）

◇大阪会場（3.21 19時～21時 大阪府青少年会館 参加者26名 責任者——内田嘉弘氏・南勲氏）

◇東京会場（3.23 15時～17時30分 エアー・インドシア会議室 参加者32名）

※集会は、シン氏のごあいさつから始められた。氏は要旨「御招請いただいたH A Jに心から感謝申しあげると共に、日頃のすばらしい活動に敬意を表したい。私にとって日本は2度目であり、多くの友人が各地におり、全く違和感がなく、第2のふるさとのように思われてならない。

インド政府は観光に大いに力を入れており、ガンゴリ地域もオープンした。たくさんの人々がインド・ヒマラヤを訪れることを願っている。できれば年に百隊ぐらいインド・ヒマラヤ登山隊を送

ってほしい。ニューデリーにいて多くの隊と会っているが、私でできることなら何でもするつもりである。H A Jの活動が日本ばかりでなく全世界に訪れるものになることを祈っている。」と語られていた。

※シン氏が持参された160余枚のスライドは、ヒラリー氏の「海から空へ」を中心に、インドヒマラヤとその周辺のさまざまな楽しみ方、風景人々の生活などをまとめたもので、実にすばらしいものであった。時間の短かさが惜しまれてならない。

また、各会場では、ガンゴトリ山群の見事な山々が稲田定重氏、他の解説で写され、この山域への理解を深めた。

インド政府観光局の豊島さんからは、仙台・宇都宮会場で、出入国に関する詳しい最新情報もたらされた。各会場とも、シン氏を囲んでの質疑が行われ、生の情報に接することができたことは大きな収穫であった。

※集会終了後、それぞれ趣向をこらした懇談会が行われ、大いに親睦を深め合った。

京都では忙しいスケジュールに一息入れて、会員の内田さん、豊島さんらのお世話で、京のお寺めぐりをされた。日光には小島さんら栃木地区の会員が自動車を出して案内した。東照宮には深く感銘された様子であった。

先年、キシュトワールに行かれた仙台の荒井会員には仙台を御案内いただいた。

このようにたくさんの会員の方々の善意に支えられて集会は無事終了した。

3月23日夜、東京で開かれた中華バイキングスタイルのサヨナラパーティは、先年ガンゴトリに入った方々も招かれ、盛大に行われ、シン氏からは、H A Jの皆さんに心から感謝する旨の言葉があった。

かくして、翌24日、シン氏は、日本に心を残しながら成田を発ちアメリカに向かった。

なお、この事業の開催にあたり、経費も含めて

多大のお世話をいただいたエアー・インディアに深く御礼申しあげたい。

シン氏の発言からのメモ

シン氏のお話の中から幾つかメモ風に記す。

○インナー・ラインの変更

ガンゴトリ地域では、従来、スリカンター・ガンゴトリ〜テリー・サガル〜ケダルナート〜チャウカンパの各ポイントを走っていたラインが北方に後退し、バギラティ河およびガンゴトリ氷河の北方に移動したもようである。(詳しいポイントは不明)

○複数ピークの許可取得とBooking Feeの支払い。

登山規則の一部変更により、事前に複数のピークの許可を取得することが可能になった(「ヒマラヤ」101号参照)。

これに伴うBooking Feeは、登山開始前(Bookingされた後2ヶ月以内)に支払わねばならない。

○トレッキングと登山の解釈について

原則として、ピッケル、ロープ等を用いて頂上をめざす行為は、トレッキングの範囲を超えるものであるが、たとえ5,000 m以上の峠を越えようともこれは登山ではない。

両者の間に明確な一線を引くことは難しいが、高所において登頂をめざす場合は登山と解釈されるのが一般的であり、この場合はもちろんIMFをととした正式の手続が必要となる。

○トレッキング許可の範囲

原則として、外国人立入禁止あるいは立入制限区域を除いてどこにでも入れる。

ガンゴトリ氷河やチャトラング氷河にも入れる。トレッキングは、前記の特殊な地域を

除けば許可証といったものは必要がない。

○トレッキングとビザ

期間が30日以内であればツーリストビザでOKである。

ただし、30日をこえる場合はエントリービザが必要となる。

インドにノービザで入った場合、空港で30日間のビザがもらえるが、このビザは延長できないので注意したい。

○将来の解禁予測

IMFは常に登山者サイドに立って関係省庁と交渉し、少しでも解禁区域を拡大しようと努力しているが事実である。

しかしながら、禁止あるいは制限区域に関する事項はIMFの管かつではないので仲々思うようにはいかない。今後ともIMFは努力するだろう。

○合同登山について

インド側との合同登山による場合は、例外的にインナーライン内の山への登山が可能になる場合がある。特に女性隊が優遇されるということでもない。

○シッキム・ヒマラヤへの入域について

2週間を限度として滞在許可が出されるがこれは内務省の特別許可が必要である。8週間以上前に申請することが必要である。

○未解禁峰への申請について

現在未解禁のピークであっても将来許可される場合がある。

トライしてみることであるが、その場合必ずIMFを通して申請することである。

どの山が許可になるかは不明である。

(文責 稲田定重)

東京集会 (5月)

次のとおり開きます。今回は3月から4月にかけて、ブータンを歩いてこられた沢上氏を講師に迎えて、最新事情をスライドを見ながら語り合う予定です。

記

5月27日(木) 19時から
日本ヒマラヤ協会ルーム(高田馬場)
最近のブータン王国事情

沢上 登氏

100円(コーヒー氏)

※出席者は事前にTelください。

昭和55年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

1.日時 昭和55年4月20日(日) 13:15～14:30

2.場所 岸記念体育館4F会議室(東京)

3.出席者 本人出席31名 委任状提出者339名
計370名(定款第25条により成立)

4.順序

1)開会

稲田専務理事が開会を宣し、山倉副会長が海外出張中の柴田会長に代ってあいさつした。

議長に尾形好雄氏(東京)を選任、議事録署名人に黒沢文代氏・高橋亨夫氏を選出、書記に松本正城氏を任命して議事に入った。

2)議事

①議案第1号 昭和54年度事業報告について
別紙報告を異議なく承認した。54年度は、ほぼ計画どおりの事業が消化された。

②議案第2号 昭和54年度収支決算について
別紙決算報告を異議なく承認した。

③議案第3号 定款の一部改定について
本会定款について、下記のとおり改定することを議決した。

○第2条の事務所の所在地を「東京都新宿区高田馬場3丁目23番地1号」に改定。

○第5条 会員の種別について次の様に改定
本会の会員の種別は次のとおりとし、理事会において別に定めるところにより、入会金および会費等を納入しなければならない。

1.正会員

1)通常会員 本会の目的に賛同し、本会の定める入会金および年会費を納める個人とする。なお、夫婦でもって会員になる場合は、それぞれ入会金を納めるものとし、年会費は、いずれか一方が納める。

2)終身会員 本会に入会後3カ年以上在籍する会員にして、別に定める寄附金を納めた者とする。

2.賛助会員 本会の目的に賛同し、別に定める賛助会費1口以上を納める団体または個人とする。

3.名誉会員 本会に対し特に功労のあった者のうちから評議員会が推せんした者とする。

なお、従来の「客員会員」は廃止した。

○本会の社団法人化にともなう法人定款については、現定款の改定に連動して改定するものとし、また、法人定款の各条項において、その趣旨を変更しない範囲で字句の修正および加除を行うことについて理事会に一任することを承認した。

④議案第4号 会費の変更について

昭和55年度から年会費を「6,000円」に変更することを承認した。変更の理由については「ヒマラヤ」第101号および102号に掲載したとおりである。

⑤議案第5号 昭和55年度事業計画について
別紙計画書のとおり承認した。

⑥議案第6号 昭和55年度収支予算について
別紙予算書のとおり承認した。

⑦その他

○役職員の旅費等について費用弁償を完全に行なうことに配慮することが提案議決された。
○遠征隊の派遣等にもなう別会計を本会収支の中に繰込むことを執行部から提案し、議決された。

4.その他 なし

5.閉会 稲田専務理事。

昭和54年度事業報告

自 昭和54年 4月 1日

至 昭和55年 3月 31日

I 一般事業

1. 情報管理事業

- 1) 調査書による各隊の情報収集・整理・ファイレリング
- 2) 情報モニターによる情報提供
- 3) コピーサービスを開始

2. 調査研究事業

- 1) 専門研究会による活動
- 2) 日本ヒマラヤ研究所設立計画書作成と資金渉外の開始。
- 3) ヒマラヤにおける遭難事故調査とその解析（1970年以降）

3. 高所登山事業

- 1) 第3回ヒマラヤ登山学校の実施 キャシードラル（6,400 m）に13名（指導員4名）を派遣、5,850 mに到達。
- 2) 第4回ヒマラヤ登山学校の編成と準備 ケダルナート（6,940 m）の許可取得、現在隊員18名、指導員4名を決定し、内田隊長を中心に準備推進中である。
- 3) 第5回ヒマラヤ登山学校の許可取得 ナンダ・コットについての対インド渉外。
- 4) 指導員登録制度についての検討
- 5) ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（7,150 m）81年ポストの許可取得、準備推進中。
- 6) サセル・カンリⅠ（7,672 m）、Ⅱ、Ⅲ峰についての渉外を実施。56年～57年実施を目標としてインドとの合同遠征を折衝している。

4. 野外活動事業

- 1) 第1回セミナー・トレッキング隊の派遣 21名（指導員2名）を12月30日～1月16日までネパール・ヒマラヤ バイラブクンド付近に派遣し、成果をあげた。
- 2) インド・ガンゴトリ山群に調査員1名を派遣、最新事情を調査・報告。
- 3) 第2、第3回セミナー・トレッキング隊の許可渉外（インド・ネパール）

5. 指導・啓もう事業

- 1) 日本ヒマラヤ会議 日山協後援のもとに、第

1回山形（12月 50名）、第2回京都（2月 45名）、第3回札幌（3月 47名）を実施した。

2) 地域研究会 水戸（4月）、福島（5月）、広島（2月）、名古屋（2月）で実施した。

3) インド・ヒマラヤ遠征情報交換会 3月16日東京で開催、14隊40名参加。

4) インド・ヒマラヤ集会 IMF幹事J・シン氏を迎えて、仙台（3.17）、宇都宮（18）、名古屋（20）、大阪（21）、東京（23）で開催した。

5) 野外活動研修会 9月に富士山で開催（3日間）、20名参加。

6) 高所登山懇談会 1月（東京）で実施、100号記念座談会を兼ねて。

7) 定例集会 札幌、酒田、仙台、東京、名古屋、大阪、京都で開催。

8) 小集会 群馬、福島、東京で開催

9) 公式報告会 登山学校報告会（10.27）

10) ネパール・ヒマラヤ研究集会 ネパール観光省登山部長 S・R・シャルマ氏を迎えて、84～88まで、札幌、仙台、東京、大阪、福岡で開催、延200余名参加。

11) 登山学校隊（8月）、カンチェンジュンガ偵察隊（2月）の杜行会を開催した。

6. 機関誌発行事業

ヒマラヤ昭90号～101号を発行（100号は記念号として増頁）

7. 出版事業

1) 年報「HIMALAYA」編集委員を委嘱し編集、8月刊行予定（120頁程度）

2) インド・ヒマラヤ記録 原稿完了、第3回報告として年報に収録の予定。

3) バツラⅡ遠征報告 8月刊行予定で編集

8. 国際交流事業

1) アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ等10ヶ国の山岳団体・機関との情報提携。

2) ネパール観光省登山部長S・R・シャルマ氏を招請 東京で公式レセプション、サヨナラパーティを開催した他、各地で岳界との懇談会を実施した。

3) インド登山財団幹事、J・シン氏を招請、東

(単位 円)

京で歓迎会、各地で懇談会を実施した。

4. 菊地評議員をインド・ネパールに、稲田専務理事をインドに派遣した。

9. 国内関連団体との協調

日山協、他との機関誌交換、事業提携等を行った。

10. 社団法人化の推進

文部省の御指導のもとに、条件整備をはかるとともに、法人化拠出金、寄附金等により、基本財産の充実につとめた。

11. 独立事務所（会ルーム）の開設と常勤職員の設置

54年11月1日より開設（3室50平方m）、職員1名を雇用、備品等を大幅に導入した。

II 特別事業

1. カンチェンジュンガ学術遠征事業

偵察隊7名を3月に派遣（2名は54年11月に先発）、本隊（学術隊を含む）29名を選考、文部省後援決定、資金および実務準備・研究を強力に推進。

2. 日本ヒマラヤ研究所開設準備

検討の委員会を開催、構想・基本計画を作成し、資金渉外を実施。

※ その他（会務）

- 会章の制定 会員より公募し、斎藤氏（酒田）の作品を採用、会旗・バッジ等を作成、氏には記念のタテと感謝状を贈呈した。
- 会員拡大運動を推進し、100余名の入会をみた。
- 第3種郵便差出局を変更した。（事務所所在地へ）
- 3月1日より臨時職員1名を雇用。

昭和54年度収支決算報告

自 昭和54年4月1日

至 昭和55年3月31日

1. 一般会計

収入の部

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用収入			(0)	(104,273)	(104,273)
		基本財産利息収入	0	104,273	
入会金収入			(500,000)	(470,000)	(△ 30,000)
		入会金収入	500,000	470,000	
会費収入			(2,600,000)	(2,174,065)	(△ 425,935)
		通常会員会費収入	2,400,000	2,174,065	
		賛助会員会費収入	200,000	0	
事業収入			(2,670,000)	(4,823,260)	(2,153,260)
		高所登山事業収入	400,000	1,874,270	
		指導啓もう事業収入	780,000	714,200	
		出版事業収入	1,000,000	1,443,360	
		機関誌発行事業収入	360,000	365,930	
		国際交流事業収入	30,000	425,500	
		その他事業収入	100,000	0	
雑収入			(100,000)	(28,697)	(△ 71,303)
		受取利息	50,000	12,743	
		雑収入	50,000	15,954	
繰入金収入			(0)	(263,000)	(263,000)
		特別会計繰入金	0	263,000	
		別途会計繰入金	0	0	
前期繰越収支差額			(0)	(4,720)	(4,720)
		前期繰越収支差額	0	4,720	
計			5,870,000	7,868,015	1,998,015

支出の部

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費			(1,820,000)	(3,786,856)	(1,966,856)
		給料手当	120,000	1,024,350	
		会議費	250,000	107,970	
		旅費交通費	250,000	158,910	
		通信費	300,000	257,765	
		備品費	200,000	363,348	
		事務所費	160,000	620,400	
		事務用品費	80,000	109,521	
		印刷製本費	250,000	314,589	
		図書費	30,000	5,380	
		広報費	100,000	67,190	
		交際費	30,000	21,100	
		消耗品費	0	69,772	
		光熱水費	0	268,37	
		手数料	0	14,560	
		法人化費	0	21,455	
		初度調弁費	0	603,709	
		雑費	50,000	0	
事業費			(3,480,000)	(4,079,762)	(599,762)
		情報管理費	80,000	68,500	
		調査研究費	70,000	30,700	
		高所登山費	280,000	129,240	
		野外活動費	50,000	86,000	
		指導啓もう費	550,000	913,305	
		機関誌発行費	1,700,000	1,822,974	
		出版費	200,000	8,600	
		国際交流費	500,000	1,020,443	
		その他事業費	50,000	0	
予備費			(70,000)	(0)	(70,000)
		予備費	70,000	0	
繰入金支出			(500,000)	(0)	(△ 500,000)
		基本財産繰入金支出	100,000	0	
		別途会計繰入金支出	400,000	0	
		特別会計繰入金支出	0	0	
次期繰越収支差額			(0)	(1,397)	(1,397)
		次期繰越収支差額	0	1,397	
計			5,870,000	7,868,015	1,998,015

2. 基本財産会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用収入	150,000	104,273	△ 45,727
指定寄附金収入	1,000,000	800,000	△ 200,000
法人化拠出金収入	1,000,000	585,000	△ 415,000
終身会員収入	2,000,000	2,793,330	793,330
一般会計繰入金収入	0	0	

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
前期繰越金	2,441,500	2,441,500	
計	6,591,500	6,724,103	132,603

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金支出	0	104,273	104,273
次期繰越収支差額	6,591,500	6,619,830	28,330
計	6,591,500	6,724,103	132,603

3. 別途会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
受取利息	48,000	19,175	△ 28,825
ヒマラヤ研究所	300,000	0	△ 300,000
運営資金	100,000	0	△ 100,000
前期繰越金	880,000	880,000	
計	1,328,000	899,175	△ 428,825

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
ヒマラヤ研究所支出	0	400,300	400,300
次期繰越収支差額	1,328,000	498,875	△ 829,125
(ヒマラヤ研究所)	(828,000)	(118,875)	
(運営基金)	(500,000)	(380,000)	
計	1,328,000	899,175	△ 428,825

4. 特別会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
受取利息	15,000	7,510	△ 7,490
負担金収入	9,000,000	10,694,700	1,694,700
指定寄附金	1,000,000	50,000	△ 950,000
前期繰越金	600,000	600,000	
計	10,615,000	11,352,210	737,210

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
カンチンジュンガ遠征支出金	10,300,000	10,582,509	282,509
亀井記念支出金	15,000	0	15,000
一般会計繰入金支出	0	263,000	263,000
次期繰越金	300,000	506,701	206,701
(亀井記念基金)	(300,000)	(300,000)	
(カンチン遠征)	(0)	(206,701)	
計	10,615,000	11,352,210	737,210

総括収支計算書

収入の部		支出の部	
種別	金額	種別	金額
入会金収入	470,000	一般会計管理費	3,786,856
会費収入	1,119,065	一般会計事業費	4,079,762
事業収入	4,823,260	別途会計支出	400,300
雑収入	15,954	特別事業支出	10,582,509
受取利息	143,701		
寄附金収入	1,435,000		
終身会員収入	2,793,330		
特別事業負担金収入	10,694,700		
その他	18,650		
前期繰越勘定	5,102,220	差引収支差額	7,766,423
計	26,615,880	計	26,615,880

※収支差額金の管理については、「財産目録」を参照して下さい。

5. 貸借対照表

昭和55年3月31日現在

借方	貸方
現金 34,208	預り金 26,850

借方	貸方
普通預金 3,471,984	前払金 112,800
定期預金 1,000,000	受取利息 2,569,822
郵便振替 2,941,500	特等見直し 506,701
郵便金 318,761	敷金・加立 400,300
山装 1,492,822	別荘・積立 498,875
電話加入 1,077,000	基本収支 6,619,830
未収金 320,000	指図書 1,106,670
80,300	指定寄附未収分 3,560,000
4,896,670	機関誌未収分 180,000
	指図書もうた収分 1,397
計 15,633,245	計 15,633,245

※未収会費は、通常会費未収分を含めていない。

6. 財産目録

昭和55年3月31日現在

種別	摘要	金額
1.現金	(34,208)	
普通預金	手許現金 34,208	
	(3,471,984)	
	富士銀行高田馬場支店 593803 1,000	
	三菱銀行新宿支店 4455421 1,572,504	
	第一勧業銀行高田馬場支店 1099791 301,044	
	住友銀行新宿支店 5136696 63,000	
	住友信託銀行新宿支店 5136696 78,007	
	東西信用金庫 63468 148,612	
	東邦銀行富岡支店 146452 1,307,817	
2.定期預金	(1,000,000)	
	富士銀行高田馬場支店 1003236 1,000,000	
3.金銭信託	(2,941,500)	
	住友信託銀行新宿支店 2,941,500	
	12285 127768	
	127769 127770	
4.郵便振替	(318,761)	
	東京 0ー48951 282,063	
	東京 0ー164655 36,698	
5.未収金	(4,896,670)	
	終身会員申込者未収金 1,106,670	
	賛助会費未収金 100,000	
	篤志寄附申込未収金 3,560,000	
	機関誌広告料未収金 180,000	
	指導啓もう事業負担金未収 50,000	
6.敷金	(320,000)	
	淀橋食ビル 506号敷金 320,000	
7.電話加入権	(80,300)	
	電話加入権 (03-367-8521) 80,300	
8.備品	(1,492,822)	
	協会事務用備品 (※備品明細参照) 1,492,822	
9.登山装備	(1,077,000)	
	登山装備一式 (在インド) 1,077,000	
資産合計	15,633,245	
10.預り金	(26,850)	
	鶴田千秋 2,900	
	郵便振替不明金 (No17) 2,350	
	Exp 研 20,000	
	アルパイン・ツアー 1,600	
11.前受会費	(112,800)	
	55年度通常会費前受分 112,800	
12.未払い金	328,174	
	紀伊国屋 (和文タイプライター) 48,174	
	東京リコー (リコピーDT/300) 280,000	
負債合計	467,824	
差引正味財産	15,165,421	

※備品明細

品名	数量	評価額	備考
宛名カードケース	2	70,000	
宛名印刷機	1	120,000	
英文タイプライター	1	60,000	
英文タイプライター	1	28,000	
スライドプロジェクター	1	30,000	
丸いす	10	50,000	
スチール机	1	80,000	
スチールキャビネット	1	120,000	
スクリーン	1	20,000	

品 名	数 量	評 価 額	備 考
和文タイプライター	1	164,522	
電子リコピー	1	430,000	
会 旗		69,000	
折たたみいす	15	33,000	
片そで机、いす	2	20,000	
両そで机、いす	1	22,000	
ファイリングキャビネット	1	10,000	
書 庫	1	25,000	
テ ー ブ ル	2	22,000	
書 だ な	2	13,000	
レターケース	1	12,000	
ガスストーブ	1	14,900	
茶 台	1	16,700	
フ ト ン	2	17,100	
タイフスタンド2型	1	11,250	
黒 板	1	11,475	
ペーパーカッター	1	10,875	
ホワイトボード	1	12,000	
計		1,492,822	
登山装備一式	一式	1,077,000	在ニューデリー
計		1,077,000	
合 計		2,569,822	

7. 刊行物棚卸現在高

昭和55年 3月31日現在

刊 行 物 名	数 量	単 価	評 価 額
1. ヒマラヤを歩き、登るために	350	2,400	840,000
2. シェルバの履歴書	24	2,400	57,600
3. カンジュラワ初登頂	370	2,000	740,000
4. インドヒマラヤのすべて	441	2,400	1,058,400
5. 中央アジア・シルクロード	530	1,600	848,000
6. カシミールの盟主メン	33	3,500	122,500
7. トリッスルの28日間	20	3,000	60,000
8. 機関誌「ヒマラヤ」	3,215	500	—
計			3,726,500

昭和55年度事業計画

自 昭和55年 4月 1 日

至 昭和56年 3月31日

I 一般事業

1. 情報管理事業

昭和56年度より「日本ヒマラヤ研究所」へ全面移管を前提として。

① 会員内外に対する情報提供と企画指導

② レファレンスサービス

2. 調査研究事業

① 専門研究活動の再編成と会員登録

② 遠征等の救助共済組織の検討と事故防止対策の研究

3. ヒマラヤ登山学校事業

① 第4回ヒマラヤ登山学校の実施（ケダルナート6,940 m 22名 うちインストラクター4名を含む 9～10月）

② 第5回ヒマラヤ登山学校の準備・訓練（ナンダ・コット 6,861 m 22名 うちインストラクター4名を含む 56年9月～10月）

③ インストラクター登録

4. 高所登山事業

① サセル・カンリ（7,672 m）遠征の具体化（56年～57年2カ年事業で実施、インド側との合同登山）渉外打合

② 56年ポスト ガネッシュ・ヒマール2峰（7,672 m）隊 準備推進

③ 登山許可申請・取得 シプリン（6,543 m）アンナプルナ1峰（8,091 m） ナンガパルバット（8,125 m） チャウカンバ（7,138 m） ガンガプルナ（7,454 m）他について、56年プレ以後各年次の許可取得

5. 野外活動事業

① セミナー・トレッキング隊派遣

第2回 シッキム・ヒマラヤ 20名（インストラクター2名含む） 10～11月

第3回 ネパール・ヒマラヤ ゴルカ地域 20名（インストラクター2名含む） 55年12月～56年1月

第4回 カンチェンジュンガ地域 20名（インストラクター2名含む） 56年4月～5月

② 自転車によるインド亜大陸横断計画の推進。56年実施予定

6. 指導啓もう事業

① 日本ヒマラヤ会議の開催。55年6月～56年3月、札幌・仙台・長野・大阪・高知・福岡で開催、各50名

② 地域ヒマラヤ集会 55年6月～56年3月、秋田・酒田・水戸・小山・富山・広島・長崎で開催

③ 野外活動研修会 9月 富士山 40名

④ 高所登山懇談会 7月・11月（東京）

⑤ 公式報告会 カンチェンジュンガ偵察隊（7月）登山学校（11月）

⑥ 定例集会 札幌・仙台・東京・名古屋・大阪で開催（小山行を含む）

⑦ 小集会 各地で随時開催

⑧ インド・ヒマラヤ研究集会 7月 札幌・東京・名古屋・京都で開催

⑨ 第2回インド・ヒマラヤ会議（旧インド・ヒマラヤ遠征情報交換会）

⑩ そ の 他

- A. 秋のヒマラヤ集会 9月（富士山）野外活動研修と併せて実施
- B. 壮行会 カンチェンジュンガ学術遠征隊（12月）、第4回ヒマラヤ登山学校（8月）
7. 機関誌発行事業
「ヒマラヤ」第102～113号の発行（月刊、26～30ページ）
8. 出版事業
1) 年報「HIMALAYA」第1号発行（8月）第2号編集
2) パツラ2峰遠征報告書発行（8月）
3) カンチェンジュンガ偵察報告書発行（9月）
9. 関連学術事業
東ヒマラヤ調査 10～12月、1名派遣
10. 国際交流事業
1) 外国代表の招請 インド登山財団総裁 H.C. サリーン氏を招請し、各地で研究会を開催（7月、12日間）
2) 代表派遣 ヒマラヤ諸国及びヨーロッパ諸国に代表派遣
3) 各国山岳団体・機関との情報交換（14カ国）
11. 国内関連団体との協調
日山協、他 関係団体との協調・交流
12. 組織整備
1) 社団法人設立許可申請（年度内の早い時期に法人化を希望）
2) 執行体制の強化、専任事務局員1名増員
3) 基本財産の充実強化（拠出金、寄附金等の推進）

II 特別事業

1. カンチェンジュンガ学術遠征派遣事業
本隊を56年1月に派遣、偵察隊（7名）派遣中・総括。
2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業
1) 施設設置・運営計画策定
2) 文献調査と調達開始
3) 研究及び情報管理システムの検討
4) 英文ニュースレター（隔月刊、機関誌「ヒマラヤ」のダイジェスト）
5) 英字紙編集準備
6) 財務渉外、専任職員の設置

3. ポスト・カンチェンジュンガ計画の樹立と渉外

中期計画による構想樹立と渉外・調査の開始

III その他

1. 運営諸規程、規則等の整備
2. 事務整備

昭和55年度予算

自 昭和55年4月1日

至 昭和56年3月31日

1. 一般会計

収入の部

（単位 円）

勘定科目	大科目	中科目	予算額	備考
基本財産運用収入	基本財産	基本財産利息収入	(450,000)	
入会金収入	入会金	入会金収入	(600,000)	
会費収入	会費	会費収入	(4,900,000)	120名×5,000
事業収入	事業	通常会員会費収入 賛助会員会費収入	4,500,000 400,000	750名×6,000 8 11
		情報管理事業 調査研究事業 登山学校事業 高山登山事業 野外活動事業 指導者講習事業 機関誌発行事業 出版事業 関連学術事業 国際交流事業 その他事業	30,000 20,000 1,800,000 80,000 2,000,000 2,600,000 1,010,000 1,500,000 100,000 480,000 50,000	専門研公費 運営費負担 各隊事務手続費 運営費負担 参加者負担金他 広告料 刊行物頒布収入 負担金収入 協賛金・他
雑収入	雑収入	受取利息収入 賃貸料収入 その他雑収入	(104,000) 30,000 24,000 50,000	貸室料 切手・コピー・手数料等
繰入金収入	繰入金	特別会計繰入金収入 別途会計繰入金収入	(1,215,000) 1,200,000 15,000	カンチ特別会計負担
前期繰越収支差額収入	前期繰越収支差額収入	前期繰越収支差額収入	(1,397)	
計			16,940,397	対前年度比9,072,382の増

支出の部

勘定科目	大科目	中科目	予算額	備考
管理費	管理費	給料・手当 旅費 交通費 通信費 電話費 文具費 消耗品費 営繕費 什器備品費 印刷製本費 図書費 賃借料 光熱水費 会議費 諸税会費 交際費 広報費 福利厚生費 法人諸費	(7,012,000) 3,000,000 350,000 180,000 300,000 150,000 50,000 30,000 500,000 650,000 50,000 1,200,000 100,000 105,000 60,000 30,000 90,000 50,000 50,000	事務局職員 役員、他 郵券、他 事務用品 事務所関係等 事務所関係等 未払い分含み 名簿、パフォーマンス他 新聞、雑誌等 事務所家賃、会場借上 電気、ガス、水道 負担金、会費等 接待費、他 会員募集広告等 慶弔、他 事務手続関係

勘定科目	予算額	備考
大科目	中科目	
事業費	手数料	17,000 郵便振替、銀行
	諸謝金	20,000
	雑費	30,000
		(8,790,000)
	情報管理事業費	50,000
	調査研究事業費	100,000 専門研活動費、他
	登山学校事業費	1,180,000 Instructor 派遣費
	高所登山事業費	40,000
	野外活動事業費	1,240,000 Instructor 派遣費
	指導啓もう事業費	1,950,000 集会開催費、他
	機関誌発行事業費	1,900,000
	出版事業費	1,100,000
	関連学術事業費	300,000
	国際交流事業費	900,000 招請・派遣費、他
	その他事業費	30,000
繰入金		(700,000)
	退職引当金繰入金支出	200,000
予備費	研究所会計繰入金支出	500,000
		(400,000)
次期繰越収支差額	予備費	400,000
		(38,397)
計	次期繰越収支差額	38,397
		16,940,397

2. 基本財産会計

収入の部

勘定科目	予算額	備考
基本財産運用利息	450,000	
指定寄附金収入	2,400,000	
法人化拠出金収入	450,000	150口
終身会員収入	1,670,000	
一般会計繰入金収入		
雑収入	1,000	
前期繰越収支差額	6,619,830	
計	11,590,830	

支出の部

勘定科目	予算額	備考
一般会計繰入支出	450,000	
雑費	30,000	募金経費、他
次期繰越収支差額	11,110,830	
計	11,590,830	

3. 別途会計

収入の部

勘定科目	予算額	備考
別途積立金運用利息	15,000	
一般会計繰入金収入	200,000	
前期繰越収支差額	498,875	
計	713,875	

支出の部

勘定科目	予算額	備考
一般会計繰入金支出	15,000	
次期繰越収支差額	698,875	
(退職給与引当積立金)	(200,000)	
(運営基金)	(498,875)	
計	713,875	

4. カンチェンジュンガ特別会計

収入の部

勘定科目	予算額	備考
負担金収入	23,500,000	隊員負担金
会員寄附金	1,000,000	
後援金	35,000,000	報道機関、他
補助・助成金収入	25,000,000	
法人寄附金	10,000,000	
雑収入	100,000	利息等
前期繰越収支差額	506,701	
計	95,106,701	

※現物寄附、事務費負担分等 24,200,000 円を除く。

支出の部

勘定科目	予算額	備考
遠征隊支出金	91,000,000	
亀井記念支出金	15,000	
一般会計繰入金支出	1,200,000	管理費負担分
次期繰越収支差額	2,891,701	
(亀井記念基金)	300,000	
(遠征隊)	2,591,701	
計	95,106,701	

5. ヒマラヤ研究所特別会計

収入の部

勘定科目	予算額	備考
一般会計繰入金収入	500,000	
会費収入	100,000	初年度維持会員10名×10,000
寄附金収入	1,500,000	
助成金収入	5,000,000	初年度
雑収入	50,000	
計	7,150,000	

支出の部

勘定科目	予算額	備考
管理費	1,530,000	(注)
初年度調弁費	1,200,000	
事業費	4,300,000	
文庫献費	(3,550,000)	文庫購入費
調査研究費	(300,000)	委託料を含む
出版費	(280,000)	英文ニュースレター、他
交遊費	(50,000)	
予備費	120,000	
計	7,150,000	

(注)職員費及び管理費のうち一般会計含み分を除く。

総括収支計算書

(カンチェンジュンガ特別会計を含めず)

収入の部		支出の部	
種別	金額	種別	金額
入会金収入	600,000	一般会計管理費	7,012,000
会費収入	5,000,000	一般会計事業費	8,790,000
事業収入	9,670,000		
雑収入(受取利息含む)	170,000	ヒマラヤ研究所支出	7,150,000
基本財産運用収入	450,000	別途会計支出	
寄附金収入	4,350,000	雑費	30,000
助成金収入	5,000,000	一般会計予備費	400,000
終身会員収入	1,670,000	小計	23,382,000
特別会計繰入金収入	1,200,000		
その他	0		
前期繰越収支差額	7,120,102	次期繰越収支差額	11,848,102
計	35,230,102	計	35,230,102

HAJ 野外活動研修事業トレッキングセミナー（第2回）

昭和55年10月19日～11月9日（22日間）

霊峰カンチェンジュンガと

豊なる生命の宝庫

シッキム・ヒマラヤを訪ねる

隊員募集ー6月30日で締切り、至急申込みを!!

すぐれたリーダー、インストラクターの指導のもとに、歴史・文化・自然・人々の生活を深く訪ね歩く旅、常に知られざる地域をもとめて1人1人の隊員が自らのテーマを持って築くゆたかな旅、それがトレッキングセミナーです。

いつも未知とロマンを描いてヒマラヤを歩き登ってきたHAJでこそできる企画であると確信しています。今回は、外国人が通常入れないシッキム・ヒマラヤに特別ルートでもって道を開きました。ふるって御参加ください。

詳細は、「ヒマラヤ」102号参照。

◆時期 昭和55年10月19日（日）～11月9日（日）
22日間

◆地域 首都ガントックから東部シッキム・ヒマラヤ、サンダクプー、フェルト、ダーズリン周辺およびカリンボン

◆隊員 17名 インストラクター1名

◆隊名 隊員でふさわしい名を付けてください。

◆経費 39万円前後（一部未確定。但し、航空運賃、為替レート等の変動によりスライドする。）

◆参加申込 昭和55年6月20日締切（定員になり次第）※シッキムは現在厳しい入域制限をしており、事務局として特別の渉外手続を要しますので早期にメンバーを確定する必要があります。至急申し込んでください。

日程

10.19日	東京12.15（AI301便、ジャンボ）ーカルカタ着20.30エアポート・ホテル泊
20日	カルカタ13.00（IC221便）ーバグドグラ着13.55ーガントックまでティスタ河沿いに4.5Hドライブ（シンタム経由）ガントック泊
21火	ガントックーペマヤンシェ（車）集落・寺院等訪問。ツーリストロッジ泊
22水	ペマヤンシェからトレッキング開始 ヨクサム（1,780m）～バキム（3,005m）～ゾングリ（4,030m）～オングラクタン（4,265m）～東トラン氷河～ゴチャ・ラ（4,940m） 帰路は一部異った道をペマヤンツェへ。ロッジ及びテント泊。
11.1土	ーカリンボン。グラハムスクール他訪問
2日	ーダーズリン。HMI、他市内見学・交流。
3月	ーサンダクプー（3,680m）頂上のロッジ泊、カンチ、エベレスト、ジャヌー大観
4火	ーフェルト。ネパールとの国境を歩く
5水	ーダーズリン。自由研修
6木	ダーズリンー車ーバグドグラ（14.25 IC222便）ーカルカタ着15.20エアポート・ホテル泊
7金	国立博物館見学 カルカタ13.45（TG312便）ーバンコック17.30着 市内見学
8土	バンコック0.50（AI308便）ー東京10.30解散
9日	

国際協力 — 私の方法 —

真のニーズを捉えて 住民の「こやし」になろう

ネパール教育協力会

石 田 進

国際協力成功のための条件

1. 国際協力の主体

—特にボランティア協力—

国際協力は、第一に政府が、第二に大企業がやるものという考えが一般化している。前項の南北問題の争点の解決には、大きな力がいるように思われ、小さな、あまりにも小さい個人の奉仕的協力など何ら解決の役にたちそうにもないように思われがちだが、果たしてそうであろうか。私はそうは思わない。個人の奉仕的協力、即ち前掲の2つに加えて第三にボランティアによる協力を大いに活かさなければ片手おちの協力となろう。(海外協力の哲学、川喜田二郎著、中央公論新書)

第一の政府は莫大な組織と権力と金をあわせて持っている。しかし、形式主義であり、官僚主義である。政府は政府の援助であり、民衆のニーズとは直接関係のない場合が多い。さらに国際社会の地位や資源・市場戦略のための地政学的見地や経済的利益と自国の国益を中心に援助の価値を判断する。

第二の民間企業は、働き蜂とECの秘密レポートに書かれたような活動的な社員と、豊富に自由に使える金を持っている。しかし、金儲けのことで頭がいっぱいで、何事も金儲けとの関連で物事を判断し、相手のことなども忘れて金儲けに社員を奔走させるわけだから、彼等を東京の本社の方ばかりに向かせて、現地社会にとけこませる時間

余裕もない。

第三のボランティアには、自発性と友情、真の人類愛がある。そこには、純粹に相手のために役立つという意志がある。利益を求めない奉仕的精神がある。従ってボランティアは、親身に、身軽に、相手の中に入り、相手の真のニーズを捉えて、相手に役立つ協力を探ることが可能である。しかし、ボランティアは、あまり金をもっていないために、協力に成功しても、継続し得ないで短期間で消えてしまう可能性もある。ボランティアは、豊かな人類愛でもって相手の心にとび込み、真のニーズを捉えたならば、それに沿って相手を前面に押し出し、その人々のこやしとなって協力する。そこで、このボランティア協力の灯を消さないためには、その中から芽が出て育ってきた事業については、政府や企業が、そっくり肩代りして育てることも1つの方法である。この場合、日本の政府や企業でなくてもよい。ドイツ、オーストラリア、カナダ等の政府でも企業でもよい。また、国際連合や国際赤十字社のようなところであれば、なお理想的である。

ボランティア協力は、自他がともに生きる方法であり、単なる犠牲やあわれみではない。相手の立場に立ち、相手の身になってその気持ちを理解し、自分の能力に応じて、できる限りこれに応じていこうという個性の開発に伴った行動である。

国際協力に、一市民として個人がかかわる方法として、ボランティア協力の方法が、最適の方法であり、私が採る方法でもある。

2. 真のニーズを捉える

TVAで有名になった後進国協力会社を営んでいるリリエンソールは、発展途上国の協力の成功の秘訣を新聞記者にたずねられて、彼は「いちばんむずかしいのは、真のニーズをつかむことです。技術的問題はどうにでもなりますよ」と答えている。ニーズの重要性くらい誰でも知っているが、「真のニーズ」とは何なんだろう。政府のニーズと、民衆の真のニーズは、多くの場合食い違っている。民衆のニーズが真のニーズかという点、そうとは限らない。銃や手投弾は、いくら住民の切なる声であっても、近隣の地域住民にとっては迷惑なことである。ニーズには自民族中心主義の危険が含まれている。世論調査票を集計・分析したような結果が真のニーズとはならない。単に民衆が望んでいるという段階ではなく、その地域の自然と、その地域に生活している人間を含んだ、大自然の意志のようなものをできるだけ正直に反映したようなニーズが「真のニーズ」である。

K・J法で有名な川喜田二郎氏は、1970年にネパールのポカラから3日は歩いたところのシーカ村で、塩化ビニールパイプの簡易水道工事を大成功させた。日本からのパイプ輸送の途中、ポカラでビジネスポーターに逃げ出されたが、シーカ村の27人の若者たちが、素足を石角でけがしながら、豪雨の中を4日間の奉仕でパイプをシーカ村へ運んだのである。この情熱はどこからきたのだろうか。村民を主体の水道計画は、水道工事の

技術を村民は十分に習得し、その後の断水故障を自らの手で修理し、新たな水道をも建設している。さらに、シーカ村東方の峠向うのウレリー村という貧しい村でも、はるか山の上から丸太をくり抜いた水路を作り水道を建設している。

なにがこのような大成功をさせたのであろうか。成功した要因は3つあると思う。その1つにボランティア協力である。政府が協力してくれば、変更させられたり、やめさせられたりしたかも知れない。他の1つは、真のニーズを捉えたからである。これは、1964年に川喜田氏がシーカ村で村民との炉端の対話から生まれた計画であった。といっても、村民が真のニーズを自覚して話題にしたのではない。いくら村民の声を聞き、それに従ってやればよいなどといっても、村民たちは、水道の塩化ビニールパイプなど見たことがないのだから、ニーズの発生しようがないわけである。村民と川喜田氏の幾回かの対話のやりとりのなかで、知らなかったネパールの山の上の村の事情がわかり、塩ビパイプのことを知っている川喜田氏から、水道管の話が出て、水道工事の対話のやりとりが起り、日本の川喜田氏とネパールの村民という違うものがふれあって、そこに膝を打つような真のニーズが発生したのである。

真のニーズを捉えるには、相手国の要請や何を援助協力するかというのではなく、現地へ行って地域住民との対話のやりとりからニーズを捉えることである。

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作づつ掲載する予定です。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

《規定》

- (1)モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3)未発表であること。

(4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見られるような写真(例：カラパタからのエベレスト)などは御遠慮下さい。

3. 住民の「こやし」になる

最後の1つは、村民の啓発教育（人材養成）に成功したからである。2人の有能な村民を現場監督として、技術援助協力者は2人の現場監督の「こやし」となって建設技術・マネジメント・企画などを具体的に教えた。2人の監督は多くの村民を指揮して、工事を主体的に進めていったところに成功の鍵があるようだ。

別の例であるが、「ネパール人の健康を守るために」と思って鳥取大学医学部助教授の職を34歳で辞して17年間、ネパールの結核診療に没頭して倒れるほど働いた岩村昇医師は、15年目に大失敗に気づいたそうである。あるとき、病院から片道3日間の距離にある山の中の村で、岩村医師は細菌性赤痢で倒れてしまったが、運悪く薬は何1つ持ちあわせていなかった。医者でも薬がなくてはなんにもできずに苦しんでいると、村長が村の医療機関である「まじない師」のところに担いで行ってくれた。

『「村長さん、わしの病気はな、細菌性赤痢ちゅうて、まじないじゃ治らんけん」「まあ、つべこべ言わんと、だまってかかれ。この爺さんはよく効くけん」耳を引っぱってギャーと呼び、私の舌をつまみ出して、背中をどやしつけてグェーと言わせ、まるで中にあるものを引きずり出すように、声も大きく動作も激しいので、そうでなくても下痢が続いて腰の抜けてしまった私は、なかば意識不明になっていた。そのもうろうたる状態の私の口に、彼はなにか草の汁をたらし込んだ。そうして、ぐっすり一晩眠って、翌朝目がさめて気がついてみたら私の細菌性赤痢は治っていたのである。実はあとになって知ったことだが、まじないのあとに飲ませてくれた草の汁は、ヒマラヤの薬草であった。いま、自分が病む身になり、ネパールの草の根の人たちの仲間に入れてもらい、その人たちの在来の伝統的医療を受けてみて、私はまったく目のうろこが落とされた思いであった。こうしたまじない師について過去を振り返ってみると、彼らは迷信家、人間の生命を軽視するものであるというので排除しようとしてきたが、現在は、「患者、住民本位に」というやり

方でやっていくには、実は「まじない師」こそ主役であるということ、私のほうがお手伝いであることを知らされたのである』（ヒマラヤから祖国へ、岩村昇著、主婦の友社）と言っておられ、「ネパール人の健康はネパール人が守る。そのため僕らがネパール住民のこやしになる」と。また「患者を病院に連れ込み、時どき診療にでかけるんじゃないくて、いっしょに住んで暮らさないと、その肝心なものが、いつまでたってもわからない」と。本当に求められているのは、コンピューター仕掛けの医療協力ではなくて、自分らがすぐに使える簡便で危険性のない医療なのである。また、栄養をよくし、環境を清潔にするだけで、大半の病気はなくなることに気がつくのである。

岩村昇医師はその考えをネパール語のスローガンに集約した。住民との「ジーフン・サガタン（生きる交わり）」から、住民たちと「サンガイ・ジュネ・コラギ（みんなで生きるために）」。「この出発点と目標をあやまれば、私と同じまちがいを繰り返すでしょう」と報告して歩いておられる。

国際協力で重要なことは、相手の「真のニーズ」を捉えて、その住民の「こやし」となることに徹することである。

（京都市中京区西之京南両町92）

※本稿は、拓殖大学の第2回国際協力問題論文優秀賞を受賞した論文の一部を氏及び関係者の御好意により提供いただいたものである。

藤江 幾太郎

山の画展 第12回

☆と き 6月6日（金）～11日（水）

☆と ころ 小田急本館 7F 美術サロン

※藤江画伯は、本会の会員でもありますので、皆様ぜひ観賞下さい。

パキスタンの祭り

—— 特にカフィリスタンの場合 ——

雁部 貞夫

パキスタンの祭りということだが、残念ながら回教国は、一般的に言えば祭儀に乏しいお国柄にならざるを得ない。八百万の神々を受容するヒンズー教や目も彩やかな色彩にあふれたラマ教の祭りの存在するヒマラヤの国々と最も異なる点である。

偶像の存在を否定する回教国に我々の概念でいう祭りに乏しいのは、極めて当然とも言えよう。ふつう回教の祝典は二つ挙げられる。一つはメッカ巡礼（回教徒の勤行で最大のもの）の地で行われるカーバの神殿へ参詣（回教暦第12月の7～10日の4日間行われる）の後、何十万人もの会衆が、互いの無事を祝し合い、大量の羊、山羊を屠って饗宴を開く犠牲祭（イード・ウル・アドハー）である。しかし、これは聖地メッカで行われる。

もう一つの大きな祝典は、回教徒なら誰でも毎年行う、断食月（ラマダーン 回教暦9月）の一カ月（30日間）の断食が明けた第10月（シャッワール）の第一日から三日間催される「ラマダーン明けの祭」（イード・ウル・フィトル）である。この二つは、回教関係の書物によく記されている。

断食明けの朝、人々はモスク（回教寺院、村には必ずある。大きさは場所により異なる）へ曉のうちに集り、導師（イマーム）の指導下、合同礼拝を行う。導師は大略次の如き説教を行う。「アラーは何ものよりも偉大にして唯一である。……アラーはラマダーンの月に断食せし者を慈しみ、愛で、報酬を与える。アラーはこの月にコーランを我々の予言者に授けた。……しかし、たとえ汝等が断食したとて、今日の祭典に相応しき布施をせねば何等酬いはない。おお信ずる者よ、アラーの意に従って施しをなせ。それは汝等回教徒たる者の義務である。……云々。」（笠間晃雄による）

この祭りが一名「慈善祭」（イード・ス・サダ

カ）と呼ばれるのは、これでよく理解できよう。より富める者が、貧しき者に応分の喜捨、施しをするのはかくて宗教上の義務である。

説教の後、回教徒は各自の家へ帰り、菓子を作り、羊を屠って神に奉げ、貧者へ施しをしたりする。この祭は、日本で言えば丁度、正月に相当するので、人々は晴着を着飾ったりするので相当のもの要りだと言っている。チャイハーナなどの賑うのは無論である。

1978年の8月、私はチトラールのウズヌー谷へ行った帰途、丁度断食月の第一日にぶつかった。チトラル川は、チトラルの町から約100km上流のクラ（Kuragh）の村で東北のヤルフーン川と西北ヘトリコー川の二手に分れる。クラはその合流点を占める要地である。

このクラで私は前後5回（15年間に）泊ったが第一印象が良くなかったせいか、縁なことは起らない。かつてジープが沢山はなかった頃、クラは避けて通れぬ所だった。蚊の攻撃が猛烈な土地で、ここでは一すいもすることはできないのである。1962年夏、サラグラールへ登頂した私の友人の一人は、ここの近くでサソリに尻を刺された。1978年の夏、私と同行した友人は、クラの旅館の庭で寝ていて（木の下で）、毒グモ（タランチュラ）に唇のうら側をかまれ、顔面の半分がまひしてしまった。

さて、クラでぶつかった断食月に入るその前夜、村はなんとなくざわついた様子。明朝から一カ月間の断食（日中だけ）が続くのだから、いつもと違う気配がするのは当然かも知れない。例のチャルポイ（縄ベット）で蚊にせめられ、どうせ寝れぬものなら、断食に入る村の様子をみていようという気になった。都合のいいことにすぐ隣り

が小さなモスクになっている。その仔細を書いておいたノートがどうしても見つからぬのが残念だが、真夜中をすぎたあたりから、何となく人々が起き出して、家の中で早い朝食でもとっているらしい。木の間にぐれに家の灯がもれ始める。

夜明けにはまだ二、三時間あいだがあると思われる頃、この地域のあちらこちらから、暁の祈りに集るようにながすムラーの声が長い余韻をひいて、このヒンズー・クシュの山あいの村の夜気をふるわせて伝わって行く。となりのモスクにも14,5人の村がムラーらしき人物の導きに従って礼拝をくり返す。毎朝の礼拝と異って、今日から断食に入るせいか入念な祈りをささげている。私は、秘儀をとり行っている場に居合わせたような緊張した気持ちで、際限なくくり返されるその礼拝を眺めていた。

チトラールでは、かなり厳密に断食は守られており、PIAのチトラル事務所にいる私の友人(チトラル人)なども、口の中につばが湧いてくると地べたにべっと吐き出していた。日の出ている間は、水を飲むことも許されないのである。これが、ラワルピンディやカラチなどの都会では、だいぶ様子が異ってくる。大きなレストランへ入ると、外国人ばかりか、明らかにパキスタン人と思われる人間が何人も食事していたりする。マリー(日本で言えば軽井沢)などの避暑地でも同じことで、賑やかな通りを、若い男女がアイスクリームをなめながら歩いていたのを見た。断食月のチトラールでは、こちらがタバコをすうのものはばかれるほどの厳格な雰囲気があった。

また、チトラールには他の地方と同じように、各地の村々に聖人や高德の人々の墓や廟所があり、その人々の忌日には、白い布をつけたノボリが立っていたり、捧げ物が供えられてのを見ることがある。これも祭事的一种だろうが、派手な祭りではない。

かつて、私はチトラールの30kmばかり北の小村カリで奥地の旅からの帰途、ある祭りに出くわした。8月末のことだったが、収穫祭(秋祭り)で、ふだんは人前に姿を見せぬ女性たちが、この日は頭衣(チャドリ)を脱ぎ、収穫したてのブドウを道行く旅人たちに与えていた。老若男女の一隊は

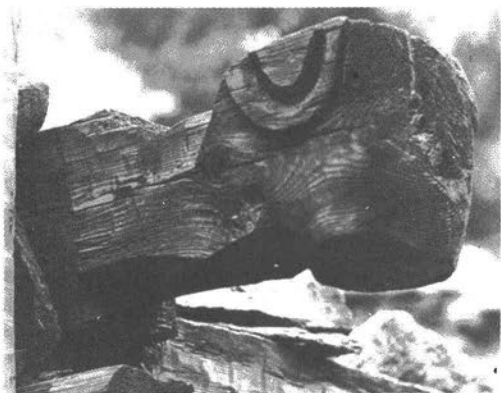
列を作って村中をねり歩き、男たちは空に向けて鉄砲を放った。轟々という響きがヒンズー・クシュの山あいを伝わっていった。この時の写真は『暮しの手帖』(89号, 1967年)にのっている。

私のチトラールに於ける庇護者ブルハーンさんの話だと、田植えが終る頃、「水かけ祭」があるという。女性たちが水をかける方式はここばかりでなくアジアに広く分布しているが、「みめ美しいおとめに水をかけられるのはいいが、あとはどうもね」というのがブルハーンさんの言であった。

× × × × × ×

カフィリスタンへは、チトラール南部のアユーン(ドロシュの北の大村)から西の深い谷が入口。三つの隠れ谷に住む約2000人の非回教徒だった人々が、今でも「異教徒(カフィール)」だった頃の生活、文化を守って暮らしている。アフガニスタン側にも数十万人のカフィールが居住していたが、今世紀初頭までには、殆どが改宗させられてしまった。

カフィリスタンの宗教はゾロアスター教とバラモン教の混淆したものと言われるが、自然崇拝の要素が非常に強い。ここの民話には、そうした類のものが多い。ガンダオと呼ばれる騎馬武人のかたどった木像が存在することでも有名であるが、馬を使わないカフィリスタンでなぜ騎馬像や、神殿を馬首の木彫で飾るのか、私は長いことその意味が判らないでいたが、ある時、この動物が、バラマインという神が乗用にするために他の動物に先立って創造した最初の動物であることに気づいた。バヤマイン神は、冬の大祭(チョウマ)の主



カフィリスタン(バンボレット谷)の
民家の柱の横木。羊をかたどったもの

神である。年に一度この神はバシュガル谷から来る。

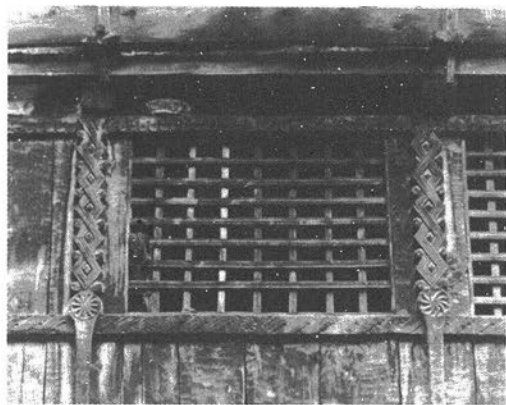
さて、カラッシュの祭りには、3つの大祭とちょっと小さな沢山の祭りからなる。ここではジョシイの祭を取り上げて解説しておこう。それぞれの祭については個別に詳細な目撃者の観察記が公表されているが、三大祭全部を観察した外国人はいないようだ。冬の大祭（チョウマ）については、一昨年の暮れに早稲田大学の学生がつぶさに見聞したり、NHKの取材班が、フィルム撮影に成功してその大略を放映した。

春の大祭

1953年の5月、イギリス人で中央アジア、カラム、ヒンズー・クシュ帯を探検したR. ショーンバーグはルンブール谷でこの祭りに出会った。それは5月18日の午後おそく始った。第一日、女性の参加は許されない。ラムソンという老人が祭儀のすべてを取りしきった。祭りの先ぶれは《ネコ鳴き》の指笛と太鼓が激しく打ち鳴らされる。祭儀の場は、「グラム」と呼ばれる小村落。やがて一人の少年がマハンドオ・ダール「大神の家」へ登って行き、そこで仔山羊が犠牲にされる。サルーズ（杜松）がともされ、血が聖火にそそがれる。聖なる火は、カラッシュの祭儀には付きものである。その祭壇は木製の馬頭で飾られており、祭壇の下方に踊りの場がある。この日は七つの曲を歌い踊った。

第二日、早朝から松明を持った人々が昨日のマハンドオ・ダール「大神の神殿」に集まる。沢山の仔山羊が、オン・ジェスタ・モーズと呼ばれる童貞の少年によって屠られ、その血が神殿にそそがれた。やがて七枚の部厚いチャパティが運ばれ、そのうちのいくらかは火中に投ぜられる。これらのすべてのチャパティは祭儀の終了後、その場で祭りの参加者が食べる。神の前での共食であろう。次に、チーズとミルクが神殿に投げかけられる。ここまでの儀式は女人禁制であった。宗教的な意味の強い祭儀はこれで終了。女性の血のけがれを忌む風習は現在も強く残存しているのである。

女性たちは手に手にクルミの木の枝を持って参加する。これはあとで踊りの時に必要なのだ。こ



カフィリスタン民家の格子窓

の日の午後は、夕方まで男も女もさまざまな種類の踊りをおどった。

第三日（最終日）。前日と同じように歌舞が続く、中には恍惚状態に入り、体をけいれんさせ、地面を転げまわる男たちもいる。ジョシイの祭りの終りを告げるのは「ダギナイの歌」であった。ショーンバーグは次のように伝えている。「毒を飲んだ女とその恋人である若者を歌った挽歌である。女の名はムライックと言った。彼女が死に類したとき、その体は毒の効き目で黄色くなった。死を見とっていた彼女の恋人が叫んだ。『ああ、ダギナイ、キングサリの花のように、おまえの体は黄色になってしまった。』もう少し補足すれば、これは有名な恋物語（民謡として伝わっている）であり、ムライックはこの若者の義妹なのである。

踊りのさいごのプログラムは、有名な「蛇踊り」で、男女が長い一列となる。人々は互いの手を直接とらず、クルミ（この附近に非常に多い）の樹皮で作った飾り輪をつかむ。踊りながらこの輪はぐりりと連環する。カラッシュ族は「はてって汗をかいた手を握るのはとても不快なので、飾り輪がその不快さを除いてくれる」と説明したという。

さいごに、オン・ジェスタ・モーズ（童貞の少年）がマハンドオ・ダールの祭壇で杜松の火を起こし、チーズとパンで供物を作る。そして祭壇と火中にその供物を投ずる。そこにいる男たちは供物のおすそ分けにあずかり、この祭儀の宗教的部分は終了する。ショーンバーグの文章には、かな

り皮肉っぽい書き方の所があり、チトラール旅行記である『異教徒と氷河』（邦訳1976、白水社）にはしきりに出てくるが、このジョシィの祭りは非常に真面目に書いてあり、私はその部分の韻律的な調子を考えて、あの本を訳出した。ご参照下さると有難い。

二つ目の大祭に秋の収穫祭がある。カフィリスタン三谷のうちの一つ、ビリール谷で実際にフィールド・ワークを行ったA・パルワールの報告文によって、大略をここに記しておこう。

果物の収穫と、穀類の収穫については、三つの祭儀が行われる。まず第一は開始の式。これは果物や穀類の収穫を許す式でデーンという。

このデーンの祭儀では、プラーバ神（又はプラバル）を祭る。おそろしい威力のある神で、ビリール谷のプラバル・ウン・グルンレルという神域には12m程の高さの四本の柱が立てられ、ブドウの収穫期にはここで火祭が行われるとショーンバーグも記している。この儀礼が済むまで、誰も新酒を口にすることができない。

プラーバには、二匹の仔山羊が犠牲として捧げられる。この祭儀が終れば、果物の収穫が始まる。山上の放牧場へ行っていた家畜の群がこの時期に村へ戻ってくる。

次のプルンの祭りには、五晩にわたり行われる。人々はゆとりがあれば晴着を着飾る。最初の晩、娘たちは「バダラックの唄」をうたいながら、各自の家から穀類を持ち寄る。バダラックとはビリールの羊飼いの名。主施律の歌詞は「高い山にいる白い山羊の乳を彼はポットに一杯のみほした」というのである。穀類は水車小屋に持って行かれる。人々はドラムを打ちならし、2晩の間歌い、おどりつづける。第5日目は午後早く祭事が始まる。母親たちや年かさの娘は、少女たちのために花を編んで帽子を作る。これをシュアレックと呼ぶ。この少女たちを先導にして人々は歌い、踊るのである。さいごに聖なる歌をうたいつつ、ひと踊りして、この祭りは終る。第三の祭り、冬の大祭（チョウマ）を述べるところまで来て、紙数がついた。（未完）

Shikhar Travels

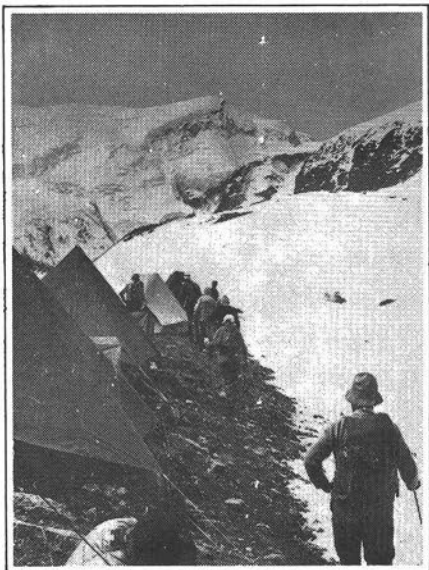
—— シカール・トラベル ——

“ 魅惑の インド・ヒマラヤ ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・

へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！

当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED

1701, Nirmal towers

barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-3972 JCIIN cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



3月16日 昨日の長丁場で心配されたポータートラブルもなくスムーズに出発。尾根上に出ているため風も強くなり雲も多くなる。この付近は、ラリグラスの満開で爽快な気分です。心配していた雨が降り出しましたが、バサントプールの村はずれのキャンプ地に全員到着。気温は朝6時の測定で+6°です。

3月17日 東面につけられたトラバース道を2時間で2,200 mのコルに出ました。ここから遙か東の彼方にカンチェンジュンガから派生する「シンガリラ尾根」が見えました、標高約3,600 mのサンダクプーが雪で真っ白になっており、これからのキャラバンが思いやられます。ジリキンティ泊。

3月18日 出発して5分も行くと尾根越しに、遙か遠くカンチェンジュンガ山群が見えました。早速ニコン提供の高性能収眼鏡をとり出し、来年の縦走コースの点検をしました。既に発表されている写真とは違い、この付近から見えるカンチはほぼ真横となるため、実際に歩かなければならない距離が測れます。「意外に長いなあー」と言うのが実感でした。尾根道を幾つか越えて行きますと地元の人間が釣をしているのに出逢いました。体長15cm程の鮎のような魚です。

3月19日 全天を雨雲が覆い不気味な中を出発。2,300 mの峠を越え、一担 1,750 mまで降りて雨の降る中をキャンプ地の田圃に到着。雷雨は夜半まで続く。夕食後ミーティングを3時間程行った。

3月20日 8時出発。2,200 mの峠を2時間で越え30分も下ると再びカンチ山群が見えたが、乱雲の発生がひどくすぐに雲の中となってしまった。1,200 m下って一担タムール河畔に立ちドバンの手前のキャンプ地着。さすがに夜も暑い。

3月21日 7時40分発。ドバンでメラ・コーラの吊橋を渡り、チェックポストに寄り、タムール河の立派な吊橋を渡る。この吊橋は4年前に出来たもので一人10パイサ(2円)の有料です。750 m登るとこの付近の中心地であるタプレジュンに着きました。この街は比較的清潔で、大きく、我

々のキャンプ地の下にはオランダの援助による大きな病院を建築中です。標高 1,750 m。ここで、ダーラン・バザールで雇用したポーター全員を解雇しました。ここまでのポーターの中には夫婦や親子等も混っており、9日間も一緒にいますと、情が移って淋しい気持ちになりました。しかし、この後山中や雪中には使えない者もいますので、より強力な地元のポーターを再雇用しなければなりません。

3月22日 ポーター再雇用のため一日停滞しました。この間に日本への通信網や、荷物のデポ・地元警察のチェック等隊員はそれぞれ張り切って飛び廻っています。タプレジュンまできても、このキャラバンはようやく3分の1に過ぎません。夜は4時間このExpについてミーティング。

3月23日 97名のポーターが出発し終えたのは9時50分です。飛行場まで600 mを1時間半で登ると草原のトラバース道となり南アのような樹林帯を歩きます。ここは全山真っ紅のラリグラスです。キャンプサイトに着いて17時から20分間雷雨と直径1 cm以上のヒョウが降り、またたく間に一面真っ白になりました。ヒマラヤの自然の雄大さをおかしく感じました。次回はラミテの峠より報告します。雨の降りしきるテレメックより(山森)

カンチェンジュンガ遠征隊 募金について

1981年 H A J が主催するカンチェンジュンガ遠征隊は、8,500 m 三山を縦走すると言う空前絶後の計画です。H A J 会員の一人一人の皆様のご協力を是非お願い申し上げます。

《募金要領》

・金額 1口 1万円

遠征学入門

XIII

実践編

隊組織について (II)

清水 澄

先月号では、チームをうまく運営して行くためには、こんな筈ではなかったということのないよう、基礎となる共通項を確認した上で、互いの信頼感を保つ方法について書いた。さて今月号の原稿を書こうと思って、いざとりかかろうとしたら大変なことに気づいた。それは原稿のコピーをとってなかったので、先月号での理論の組立てを思い出せないということである。続き物の原稿を書く時は、自分の文章がまだ活字となって表われないうちに次のを書かなければならないので、なかなか厳しいものであるということが解った。これを防ぐには、2カ月分を一遍書いて翌月分を手元に置き、次月から順繰って行けば良いのだが、ノ切りがせまってあわてて筆を持つ小生のこと故そんなに準備がよい筈もない。この面での先輩諸氏の偉大さを感じるやせつである。この態では良い遠征を目ざす諸氏に対して、あい済まぬと思う次第であるので、今月からはその轍を踏まぬよう心

がけよう。

さて遠征学入門を読み返してみると、西郡論文はチーム論、とりわけリーダー論重点である。さすがは常日頃すばらしいリーダーと尊敬している西郡氏のこと、自分でも常に研鑽を積まれ、なおかつ謙虚さをのぞかせ、教えられることばかりである。自分の遠征はあまり良くなかったように書かれているが決してそのようなことはなく、すぐれたリーダーであり、傑出した人格の持主であることを、氏の名誉のためあえて記す次第である。

思わず前置きが長くなってしまった。本論に入ることとする。

重要な役割分担

遠征に出かけるに隊を組む以上は、それぞれの持分に応じなければならない。最も大きな持分は隊長と隊員の別である。人間としては皆同じであっても、遠征隊では隊長と隊員では資格が異なることをわきまなくては、良い遠征は目ざせない。

隊長、つまりリーダーは隊の総括責任者であると同時にタクティックス、日本語でいえば戦略と戦術の担当者である。遠征隊によっては戦術担当といった役割の隊員をおくこともあるが、それも隊としてのタクティックスのデザインを考えてゆく上で、隊長を補佐する役目であって、現地での判断や決断を隊長に代って行うものではない。したがって遠征隊にあっては、隊長が最重要であることは言をまたない。

現地にあって隊長は孤独である。間違った判断や決断を排し、良い遠征を行いたいと考えるばかりでなく、その判断、決断が、出来ることなら隊員にも抵抗なく受入れられるものでありたいと願うからである。悪い方向へ行くと、遠征進行中といえども隊員が離散することになりかねない。もっともこうなるには先月号で書いたような方法での、チーム作りをしていない場合であろうが。

日本では、隊長が自分の目ざす遠征の理念を示しつつ、同調してくる気に入った隊員を結集する方法でのチーム作りは、西欧などに比し極端に少ない。この方法はチーム作りとしては理想に近い形であろうが、極限にさらされると、何年かのつき合いという積み上げがないので、理念が一気に

崩れ去って潰滅するという危険も大きいと云わざるを得ない。一方、日常から知っている者同志でのチームでは、自ずから序列も出来ていて、タテ系列に慣れている日本人向きと云えそうである。チームが先にあって、後から隊長をお願いして来る場合も、殆ど同様と云えるが、あの隊長のことなら我々はきいてやろうではないかという、日本社会での長上に対する美風といったもので通用する。こうなると隊長はさ[●]せても[●]ら[●]う[●]て[●]い[●]る[●]も[●]のであり、隊員からはし[●]ても[●]ら[●]う[●]て[●]い[●]る[●]隊長[●]である。この観念は現地での極限時にはかなり大切となる。西欧式チーム作りでもこの概念は成り立つし、重要である。タテ系列は民主化の仇敵の如く云われるが、そこにある美德を見失ってしま[●]っ[●]て[●]は[●]な[●]ら[●]な[●]い[●]。し[●]て[●]や[●]っ[●]て[●]い[●]る[●]隊長[●]であり、さ[●]せて[●]や[●]っ[●]て[●]い[●]る[●]隊長[●]であ[●]っ[●]て[●]は[●]な[●]ら[●]な[●]い[●]。要は底に流れる観念が大切である。この考え方でリーダー・シップの問題はかなり解決がつく。タテ系列が悪く云われるのは、上級に立つ者がまま逆の考え方を[●]するからであり、それは社会成立の原点に反する。遠征隊も一つのタテ系列なのではある。

さて隊員は隊員でそれぞれの担当分野がある。渉外、装備、食糧、輸送、梱包、会計、記録などの外、更に細分されることもある。それぞれが自分の持場を全うすることが、隊という組織を支えることであり、運営、進行もスムーズに捗ることになる。お互いはそれぞれの担当を相手にまかせ[●]ることで責任を確立すると共に、足りない部分は補い合[●]って、任務を全うすることが大切である。大きな遠征になればなる程、他人の分野は判らなくなるものであるが極力知るように努めなければ[●]な[●]ら[●]な[●]い[●]。またそれぞれの担当には種々の決定を下して行かなければならないことも沢山あるが、大過ない限り担当者[●]に委ねることがよい。但し報告は常に隊の責任者にしていなくてはならない。このようにしていることで、隊の組織は徐々に強化されて行く。

よいチーム作り

遠征は、何といっても現地ですまくやる[●]ことが大切である。それには国内での準備を通して、よいチームを育て上げて行くことが重要となる。お

互いがよく気心を知ること、相手の立場を尊重すること、節度を保った行動をすること、責任を全うすること、等々。そして過酷な世界に居ると人間は狭量となり、相手を許せなくなり易いので、寛容の精神を養うよう心がけ、包容力のある人間になることを目指すべきである。

勿論その遠征が必要とする技術、体力、精神力を培うことは云うまでもない。

チーム作りを進めて行く上で有効なことは、実務準備を真剣に行うことの外に、登山思想の討論を徹底的に行うとか、厳しい山行を数多くやることである。これらは、極限の状態になった時、相手はどう考え、どういう行動をとるか知ることが出来るという点で、現地へ行ってから非常に役立つ。要は裸のつきあいを通して相手を知ることであり、酒を飲んで議論をしてもよいのである。

さて、よいチームという面では、自分たち遠征隊員同志だけによくてもダメなのである。外部から見てもキチンとした礼節が認められなくてはならない。関係筋への手続きや届出が完全なことはいうまでもなく、お世話になった所には礼状を忘れないこと、現物寄贈先には礼状の他に現地の写真なども大切である。

また、家族、勤務先も重要である。兎角、家族はつばばめ敷にあかれがちであるが、長い留守をいわず送り出してくれるのは家族なのであるから、労を惜まずによく説明をして理解を得ることである。更に出来るなら遠征の前後に家族会を持つ外、お互いの家族が隊員ぐるみでつき合[●]ておくこともよい。勤務先の方も休暇をもらうばかりではなく、遠征を理解してもらい、好きで行く遠征（登山）であっても文化の最先端を担うものであることを解ってもらい、登山というスポーツが社会的にもっと認知されるよう努めたいものである。

最後に実行委員会についても。遠征母体によって実行委員会の形もまちまちではあるが、いづれにしてもこの人達は、自分が行くでもないのに遠征を支えてくれた人達なのであるから丁重にお礼を、行く前も帰って来てからもしたいものである。

こうして総合的に強い組織の隊が生まれ、よい遠征が実施できることになる。

ヒマラヤの虎 (1)

五百沢智也

ヒマラヤン・タイガーは、昔、ダーズリンを中心にして活躍していたシェルパ・ガイドの名誉称号であるが、それと違いここで言うヒマラヤの虎は、ヒマラヤに棲む野生虎のことである。

もっとも、ヒマラヤはヒマラヤでも、虎はその最南部の山麓一帯に棲息しているだけで、氷雪の輝く高い峰にいたるのではない。

1973年2月、ヒマラヤ一帯の取材を続けていた筆者は、ネパール南部のチトワンでタイガートップスジャングルロッジを経営しているジム・エドワーズ氏からそのロッジへ3泊の招待を受けた。かつてネパール王室の狩猟場であったチトワンのジャングルや湿原の一帯をなわばりにアメリカ人が野生動物観察と自然生活を楽しむためのロッジを経営していて、料金は張るが実に楽しい生活が待っているということのはかねがね聞いていたから、筆者はさっそくこの招きに応ずることにした。

クーンブ地方やカリガンダキのトレッキングを終った2月の初め、筆者はポカラからメゴウリイへ向う飛行機に乗った。ポカラからメゴウリイに行く客は筆者1人であとはカトマンドゥ行きらしく、芝生の上での荷物の仕わけでは筆者の荷だけ1つ離して置いてあった。15時45分離陸。飛行場南にひろがるセティ川の大峡谷をみながらレフトターン。マハバラート山脈を越えともうチトワンの盆地が見える。右手の窓から見えるのは畑と民家、左手には森林と草原がひろがっている。

16時ちょうど、メゴウリイの芝生の飛行場に着陸。わずか15分間のフライトだ。飛行機はYS11をちょっと小さくしたようなホーカーシドレー748で、タラップを下すのを待って地面へおりる。やはりおりたのは筆者1人だった。目の前に大きな象が背にやぐらをつけて待っていて、ロッジの野外活動の責任者であるチャールス・マクドガル氏が自ら迎えに出ていてくれた。ポーターに荷を象の背に運んでもらい、筆者もマクドガル氏と一緒に象に乗った。ふりかえると、飛行機のヨーロ

ッパ人の乗客達がたくさん芝生におりてこちらをカメラで狙っている。マクドガル氏は、動物達の活動時間帯が早朝とこの日没前なので、まずジャングル一帯の観察をやってからロッジへ行くプランであると説明してくれた。

飛行機とたくさんの観客を後に、象にゆられながらのっしのっしと飛行場を出ていくのは、ちょっとしたいい気分だ。象の背につけた櫓の一角に脚をからませて両手をフリーにし、カメラと双眼鏡を用意する。象の歩くリズムは4拍子、背中がムクムク動いてなんとなくバランスがとりにくい。草むらから斜面をかけおりて川に入る。ジャブジャブと川の中はどまで来て立ちどまり、ジャーツと放水。川の中はそうした気分になりやすいのか、ボトボトッ、ジャブンと爆撃もよくやる。

・対岸にのぼり、疎林を抜けて二度目の川を渡る。この川は水流が三本に分流している大きい川で訊くと、これがラブティ川であるという。この川のむこうにあらわれた森の入口には、高い白い標識が打ちつけてあってナショナル・パークのスペルが読めた。

森の中の下草は踏み分けられてトレイルの綱目模様ができている。薄暗い森の中をマクドガル氏と象の首ねっこにまたがった象使いがピーンと5官のアンテナを張った状態で緊張したまま、ゆっくりと象を歩ませる。いつしかこっちにもそれがのりうつって野生に帰ったような感じで反射神経をときすまし、ものの気配を感じとろうと努めた。眼も耳も皮膚さえも精一杯に張りつめた状態にする。ときどき象を止めて静かにうかがい、ときおりはギャロップで先を急ぐ。ふと立ち止まり、息をひそめると暗褐色のレイヨウか鹿のようなけものがダッと駆け抜け、それを追う大きいうす茶色のけものがヒューンとすぎる。ちょっと間を置いてこんどは黒く細いものが駆け抜ける。下草や低木にさえぎられて確実に見とどけることはできなかった。しかし鹿はスポッテッド・ディアらしい

という話だった。次にでてきたのはヒマラヤ山中にも多いラングール猿だ。枝から枝へと群がすぎる。川へ出ると対岸にワニ（クロコダイル）と孔雀の姿があった。森の中には旧河道の河跡湖が湿地と共に残っていて、いつもきまってワニの姿が見られる場所もあるという。広い草原に出るといきなりブファファという声がした。あそこだと言われて見ると一角サイが草むらの間からこちらを見ている。シャッターを切る。2枚目を切ろうとすると捲けない。もう終りだ。フィルムチェンジを始めるとサイがゆらりと動いて横向きになった。がっちりした体格が大きくひろがってすごい迫力だ。さらに動いて後をむいて歩きだす。腰の下にぶらさげた丸いよろいの草摺りのような皮にイボイボのあるやつをゆすって歩く。ようやくフィルムが入ってカメラを構えると草の縦線がいっぱいにふさがってよく見えなかった。鹿が出て逃げた。白いしっぽを立ててジャンプしながら走る。一枚シャッターを切る。ホッグ・ディアだ。川ばたにはチュウサギとアカツクシガモがいる。森の中からはどんな鳥の声なのかポーッポポポポ、ポッポー、パワーポワポワというのが聞えてくる。草原の中をワイルド・ボアが2頭走り去った。

森の中は、だいぶ薄暗くなってきた。夕焼けの色が水面に反射するのを見ながらロッジに向かって川を渡る。ロッジはナラヤニ川と合流するラプティ川をちょっとさかのぼったあたりの南岸にあるのだった。象は高床式で一階の無い三階建ての宿舎の二階に横着けになる。二階のフロアーへ象の背から移り、荷をあてがわれた部屋へ入れる。こちらへどうぞと言われて、マクドガル氏と別棟のラウンジへ入る。

すぐ飲み物が出て一息いれる。ラウンジは丸い建物でまん中にファイヤー・プレースがありそれをかこんで椅子があり食卓がある。鳥類図鑑や動物図鑑、お客の書く観察ノートや感想文ノートも置いてある。お酒のバーも一角にあって、ビール1びん14ルピー、ウィスキーはシングル10ルピーであった。

夕方、お客全員を集めて、マクドガル氏の挨拶とこの一帯の自然と野生動物の解説があった。これは大切なことで、常に宿舎をとりまく野生動物

社会の観察を続けていてその現在状況をつぶさに把握していなくてはお客にそれを楽しんでもらうことはできないし、それをお客に解説することも最も大切なサービスであるにちがいない。あとは食事の鐘がなるまで、焚き火を囲んでの語らいのひとときである。このロッジのネパール人マネージャー夫妻やオランダ人夫妻、フランス人カップルなどと一緒になって語り合った。後のテーブルの用意が済むと田舎の小学校のような手振りの鐘がなって、たくさんのテーブルに思い思いの席をとる。次から次へ出る料理は評判どおりなかなかおいしいものだった。

翌朝6時起床。薄暗いうちにボーイたちがお湯をくばりにくる。顔を洗い、ひげそり、洗濯をすます。6時45分朝食。7時50分、今朝の客は5頭の象に分かれて乗り、ゲームに出発。ゲームというのは銃を使わない巻き狩りで、けもののような草やぶを遠まきに囲み、象の包囲網をすこしずつ縮めて中にいるけものを全員で見ようというものだ。キッキキキとけたたましい鳴き声で鳥が飛ぶ。朝もやのたちこめる草原に入り、しずしずと輪をつくりはじめる。草の背たけは象にのっても眼の高さほどもあるから3mぐらいか。川をわたり、こんどは7~8mの高い草原に入る。曲流帯の場所による土壌水分の差が草の種類と対応するようである。もっとも高い草たけは象にのって私達の頭上5mはある。こうして息をひそめてのゲームだったが、猫の仔一匹出なかった。ふーっと大きい息をついて全隊渡河して文字どおり河岸を変えようとしたら、後の象からタイガーの声あり、いっせいに水ぎわに戻る。指さす方を見ると、上流200mばかりのところを反対方向に川を渡る虎の姿があった。ベンセイシュクシュクといった具合に水を切り、渡っている。逆光なので、ストライプはよくわからないが、ファインダーでピント合わせにあせる。望遠用のテレプラスをつけているのでなかなか合わせにくい。適当にシャッターを押す。露出はいつでもいいように合わせてあったので心配なかったが、象も動いていたし、ピントが心配だった。あとで聞いてみるとみんなはあっけにとられて見ていただけでシャッターを切ったのは筆者1人とわかった。

ヴェリエル・エルウィン小伝

連載 (9)

転身・訣別・離反

～その3～

藤井 毅

人類学的調査への関心

《「1936年、私たちはカランジアから別な村へと生活の場を移した。そこにはもはや教会堂の姿はなかった。私たちは人類学——というよりもむしろハッドンのいうところの“博愛主義的人類学”に興味を持ちはじめていた。Gond Seva Mandalも Tribal Welfare & Research Unitへと改名改組したのである」、『日記』pp xxix—xxx。》

民族運動・政治活動よりの後退、国教会との絶縁は結果的にエルウィンに大きな自由をもたらし、人類学的調査への関心を呼び覚ました。もはやキリスト教の価値観・倫理観とその教会組織に束縛されることなく、“科学的”に事物を見ることが出来るようになったのである。1935年末までに、実に彼は、「イギリス国教会はイギリス帝国主義の補完物である」という結論にまで到達していたのである。

1935年11月11日、つまりカルカッタの国教会大監督に“記念すべき”手紙を送った日、エルウィンはもうひとつの大きな決定をする。即ち、ゴンドの呪術師であるパンダー・バーバーと「サーキー」の交りを結ぶことを決めたのである。ゴンドの人々の中には友人関係の親密さの度合によって様々な呼称に用いられていたが、「サーキー」とはその中でも最も神聖で「魂」の友とされる関係であった。その交りを結ぶ儀式は12月6日の夜にとり行われた。祭火が焚かれ、それにギー（精

製バター）が注がれた。牛愛で手を清めた後に互いの額に触れる。手を重ねあい、念珠とやしの実が交換された。それから供物をのせた真鍮製の皿が二つ運ばれてきて、それを三度交換した。永遠に続くサーキーの関係がこうして結ばれたのである。

当時、中央インドのみならず多くのインド人にとってキリスト教宣教師の態度は忌み嫌われていた。ゴンドの人々の中でもけんかのときに最も相手を愚弄する言葉は「このキリスト教の犬」というものだったほどだ。その上、白人は常にサーハブ（主人）として存在しつづけていた植民地下のインドでは、“トライブ”の人々よりバーイー（同等の友人等への呼びかけ）と呼ばれるような関係を持つこと自体ほとんどありえなかったことであるのに、更にエルウィンは儀礼にかかわる交友を持つにいたったのである。エルウィンがいかに信頼されていたかを示して余りある事実である。

エルウィンは、このパンダー・バーバーを通して、その宗教・儀礼・神話とゴンドの人々の世界に深く入っていく。そして、自分が関心を抱き愛する人々をよりよく知るために、彼は先人の人類学上の仕事を渉猟し、自らもまたそれに関心を抱くようになるのである。しかし、彼はもとより人類学を専門とする研究者であったわけでもなく、その専門教育を受けたこともなかった。ゴンドをはじめとする人々の中で暮していくうちに必然として民俗学・人類学へと接近していったのであ

る。詩・文学に造詣の深い彼にしてみれば“トライブ”の人々の神話は宝庫に思われ、神秘主義をはじめとする宗教研究に費やした時間の長さよりすると、彼らの宗教は大きな興味をひきおこすものだったのである。そして工芸・絵画にも彼は多大なる関心を抱いた。幾度か彼は学術論文の体裁をとって論文を執筆しようとしたがあまり成功したものとはならなかった。論文にしては多分に文学的でありすぎ、また多分に独学の長所と短所が強く出すぎていたのである。むしろ、彼の一連の著作は「記録文学」として読まれるべきものである。人類学の主流にはならなかったが、他のいかなる人類学者よりも“トライブ”の中に長く暮し、彼らのかかえる問題を理解していたのはエルウィンだったのである。

1936年にはロマン・ロランの序文を伴った著書 Leaves from the Jungle London, John Murray, が出版される。この本は1932年から35年にかけてのカランジアでの生活を記録した「日記」の体裁をとっていた。そこではゴンドルの中での生活が、日々見聞したものが、最初は驚きをもって描かれている。そしてそれはじきに深刻さの中にも軽いユーモアを交えた文章へと変っていく。驚きを乗り越えてエルウィンが変っていく過程でもあったのだ。1932年から35年といえば、前回見てきたように国教会との絶縁にいたる苦しい時期でもあった。しかし、同書中それには全く、片言隻語たりとも触れるところはない。彼にしてみればそれがあまりにも傷の深いものであったからであり、また不合理から科学へ、そして人類学的調査へと関心を展開させていくうえでも、彼なりにその過去に整理をつけたかったからであろう。しかしながら、キリスト教団体の一員であった頃の彼・民族運動に同伴していた頃の彼・“トライブ”の中で奉仕活動を始めた頃の彼・そして“トライブ”の人々の生活と問題を描き始めた頃の、それぞれのエルウィンを知る人々にとって、それは確かに誤解されやすい本であった。

ともかく、NEFA (今のアルナーチャル) へと招かれる直接のきっかけは1936年以降の彼の活動の中にあったのである。

C・F・アンドリュースとMK・ガーンディー

さて、国教会と絶縁にいたるまで密接な連絡を保ち続けていた上記二人との関係も、エルウィンが変っていくにつれ、質的に変化していった。

C・F・アンドリュースはエルウィンの“トライブ”の中での活動を積極的に評価しようとはしなかった。奉仕活動自体を否定するというのではなく、“トライブ”の中で暮し、彼らを受け入れすぎるあまり、その反キリスト教的な面・野蛮・残酷な習慣までも容認してしまうのではないかという懸念によるものであった。すでに、ある一定の価値観でもって他を裁断するようなことから遠ざかるうとしていたエルウィンにとって、その忠告・批判はもはや意味をなさないものであった。自然に二人の間は疎遠になり、アンドリュースはその生涯を1940年カルカットで閉じたのである。

一方、ガーンディーは揺れ動き変っていくエルウィンを見守っていたかのようにあったが、あるときエルウィンをして“ナルム”(優柔不断)と評したことがあった。その寸言は彼にとって少し意外だったようでエルウィンはその真意を手紙でたずねた程である。あるものに意地になってしがみつくことを以て旨となすガーンディーにしてみれば、エルウィンはやはり“ナルム”とみえたのかもしれない。エルウィンはガーンディーに対しては常に敬愛の念を抱き続けていたのだが、1933年以降“トライブ”の中で暮していくうちに、ガーンディーの唱えるもののうちいくつかに根本的な疑問を抱くようになっていった。つまり、過度の性生活・食事への禁忌、チャルカー(糸つむぎ)への執着などは、“トライブ”の人々の日常生活にとって少なからぬ打撃となるものであり、それらのものへの過度の固執はある価値のゆがみのように思われるようになっていったのである。それに、“ガーンディー主義者”と称する(一時エルウィンもそれになりかけたことはあったが……)一群の人々を見るにつけ、30年代後半から40年代にかけて、やはりその関係は疎遠なものになっていったのである。

=つづく=

事務局日誌

月日	曜	摘 要
4. 1	火	54年度収支決算書作成。総会通知発
2	水	送
3	木	会員名簿作成。
4	金	
5	土	「ヒマラヤ」102号校正。
7	月	事務局会議（ルーム 10.30～17.00）
8	火	Shikar（Agents）に打電。
9	水	東京地区理事・評議員打合会文書発送。
10	木	総会資料タイプ・印刷。理事会及評
11	金	議員会開催通知。
12	土	カンチ事業スポンサーとの協議。
13	日	
14	月	文部省助成係と法人化協議。
15	火	東京理事・評議員打合会（ルーム19.30～）
16	水	文部省提出資料作成。「ヒマラヤ」102号発送。
17	木	クマールから電話あり来日延期。

月日	曜	摘	要
4.19	土	文部省法人手続等協議（文部省、稲田）。 55年度第1回理事会（ルーム）。カン チェンジュンガ企画会議。	
20	日	監査（ルーム）。55年度評議員会（ル ーム）。 55年度通常総会（岸記念体育館 13.00 ～ 14.30）セミナートレッキング報告会 （同 14.30～16.00）	
21	月	会費納入，アンケート等文書作成。	
23	水	会章（バッジ，ワッペン，他）見積。	
24	木	会費明細（個別）書作成、東京4月例 会（ルーム 19.00～）	
25	金	会費明細（個別）書作成、ヒマラヤ103 号印刷依頼。	
26	土	会費，アンケート，名簿作成文書全会 員に発送。	
27	日	“ “ “ “ 山書の会総会でルーム使用。	

~~~~~ 寸 感 ~~~~~

今月号の特集として「ヒマラヤの祭り」を予定していましたが、編集者の不手際で「パキスタンの祭り」だけになってしまいました。またの機会に、ネパール、インドの祭り、未完となったパキスタンの祭りの続編をと考えております。

ネパール教育協力会の石田氏の御好意により、氏の論文の一部を転載させていただきましたが、ヒマラヤの国々と、登山やトレッキング等で関わりを持つ我々にとって、相手の立場に立ち、相手の身になってその気持ちを理解することが、やはり大切な事ではないでしょうか。(I)

## ヒマラヤNo.103 (6月号)

昭和55年5月10日印刷 55年6月1日発行

發行人 柴田金之助

編 集 人 伊 東 滿

発 行 所 日本ヒマラヤ協会

〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1-506

## 原稿募集

ニュース ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀 行 遠征、トレッキング、旅 etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A J に対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラマ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。

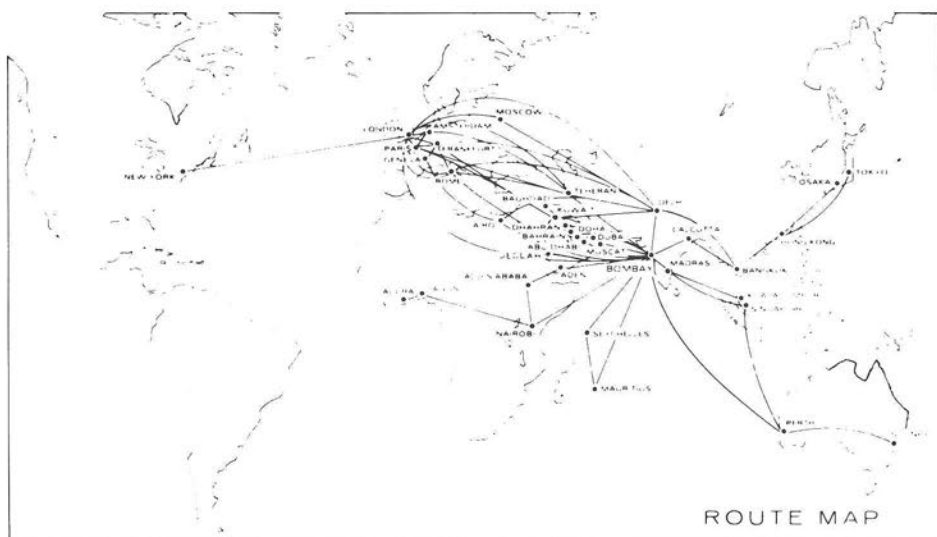
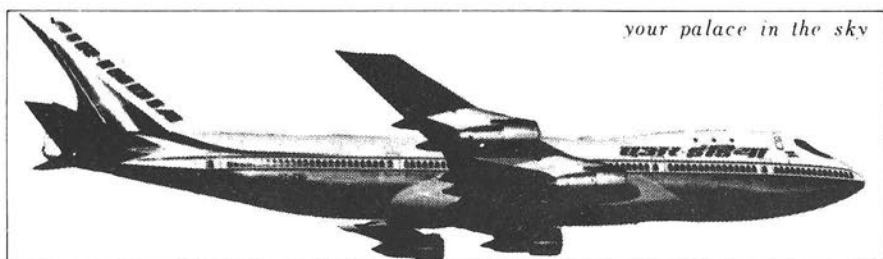


**ICI 石井スポーツ**



- 新宿登山本店 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601代
- 新宿西口店 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードキアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219





世界の40都市をネットする  
**エア・インディア**

|    |                      |                      |
|----|----------------------|----------------------|
| 東京 | ●千代田区有楽町日比谷パークビル     | 〒100☎ (03) 214-7631  |
| 横浜 | ●中区常盤1-2 関内日本ビル      | 〒231☎ (045) 651-2874 |
| 大阪 | ●東区備後町松豊ビル           | 〒541☎ (06) 264-1787  |
| 神戸 | ●萁谷区布引2-1-3 新布引ビル    | 〒651☎ (078) 222-1919 |
| 福岡 | ●博多区博多駅前1-3-21 八重州ビル | 〒812☎ (092) 471-7172 |